2016

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2016年
3月号
No.633

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2016年
2月号
No.632

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2016年
1月号
No.631

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2016年
6月号
No.636

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2016年
5月号
No.635

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2016年
4月号
No.634

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2016年
9月号
No.639

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2016年
8月号
No.638

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2016年
7月号
No.637

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2016年
12月号
No.642

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2016年
11月号
No.641

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2016年
10月号
No.640

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
1月号
No.631

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

謹賀新年

平成二十八年 元日

二〇一六年・平成二八年
丙申（ひのえさる）

今年は申年だが、十干十二支で云うと「丙申（ひのえさる）」にあたる。

十干と十二支の字の中には万物の栄枯盛衰の象が内蔵されていて、「丙」は「炳らか」で「草木が伸長して、その形態が著明になった状態」という意味がある。

また「申」は「呻く」で「万物が成熟して締めつけられ、固まってゆく状態」という意味がある。

「万物の栄枯盛衰の象」と云うと難しいが、樹木の成長に例えるとわかりやすい。

まず種子の内部に新しい生命が萌し始める。やがて伸び広がり、茂ってゆく。成熟をむかえたのちに、だんだんと衰微へと向い凋落するが、ちゃんと新しい生命を種子に宿している。それを何度も繰り返して大きく成長し、やがては次の代へバトンタッチということになる。

その過程を「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」の十干と「子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥」の十二支に置きかえてあるわけだ。なるほど。

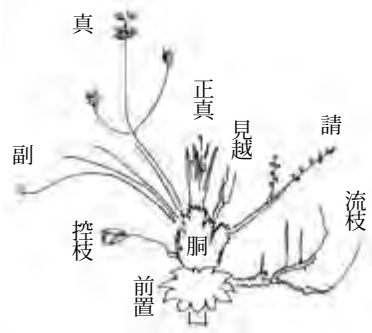
さて「丙申」の意味は「形が明らかになる」と「成熟して固まってゆく」だが、自分のことに置きかえてみて、形になりつつあるもの、実を結びつつあるものを探してみよう。この一年に、それらを形にし、実を結ぶことができますように。

五葉松の立花

＜4頁の花＞　仙溪

冬から早春へ向かう季節の立花。行の花形で、基本通りの役枝の配置に立てているが、真の重心が中心からはずれているので、流枝を大きくして真とバランスをとっている。細枝にまで苔のついた梅は、なんともいえない味がある。この立花の格を上げてくれている。

花材　五葉松（松科）
松（松科）
梅擬（黐の木科）
赤芽柳（柳科）
紅梅（薔薇科）
白椿・薮椿（椿科）
水仙（彼岸花科）ほか
花器　陶花瓶（市川博一作）



水仙に寒菊

＜表紙の花＞　仙溪

父はよく水仙一色の立花に、寒菊の前置を好んで加えていた。寒さで紅葉した葉色の上品な美しさと、寒中に咲く健気な黄色い花が、水仙の相手に相応しいと感じていたのだろう。精緻に編まれた花籠に寒木瓜と共に水仙と寒菊をいけた。寒菊は下品にいけたらあかんと母が云っていたのを思い出す。花の持つ品格を引き出したい。

花材　寒木瓜（薔薇科）　水仙（彼岸花科）
　　寒菊（菊科）
花器　花籠（公長斎小菅）

横から見た奥行き

若松　千両

＜2頁の花＞　仙溪

昨年の「富春軒初春の会」に花手前でいけた生花である。お正月花の生け直しの参考にしていただいてはどうだろう。若松の生花は7本の枝でいけるが、留と控の2本をはずし、代わりに千両を入れている。千両は黄実でもいい。丁度いい長さの横枝を利用するのだが意外と難しい。松とのバランスを考えて、総囲、留の沈みにも入れている。

花型　真型　二種挿し
花材　若松（松科）
　　千両（千両科）
花器　青竹竹筒（9寸）

新春の彩り

＜3頁の花＞　櫻子

こんなに大きな仏手柑をいけるのははじめてだ。家元に頼んだら丈夫な枯れ枝に乗せる形で花器にとめてくれた。びくともしない。

仏手柑は文人的ないけ方が多いけれど、私は明るくモダンにいけたくなる。3色のバンダと白椿の組み合わせで、新春の彩りを。

花材　バンダ3色（蘭科）
　　仏手柑（蜜柑（みかん）科）
　　白玉椿（椿科）
花器　陶コンポート（柳原睦夫作）

横から見た奥行き

立華時勢粧を読む ⑲

立花秘傳抄　五

立花名目 並びに 訓解（つづき）

かこいの事

立花のかこいと云うは、たとえば屏風障子にて見苦しき所をかこえば、そのまま花やかになるがごとし。さるによりて上手は松、ひおうぎを好まずして、美花美葉をもってかこう時は、かこい則ち美景となりて、花あつく見所多し。然るに初心の内は、間あきをふさぎかね、かこいたい意ばかりにて景をとるの修練なし。上手になりては、わざと間あきを好みて一景を指し出す。よくよく意をつくべし。

前にてかこう花あり。後ろにてかこう花あり。前にてかこうと云うは、まず胴、前置を前へはらせ、美花美葉のあざやかなるをもって、胴の左右、請、控枝の前にしげく立てる時は、花丸く、胴あつくなりておのづから後ろにかこいいらざるなり。また後ろにてかこうと云うは、前に下草すくなく、花葉左右へ出でず、胴作り立てばそなる時は、後ろにて下草しげく遣いて、景をとるといえども見所すくなし。

谷洞の事

立花の谷と云うは胴作りの後ろ、正心の前くつろぎて、奥深きところあるをいうなり。谷はうつろと読ませて、木陰くらく幽なる所を云うなれば、美花美葉のあざやかなるを少し沈ませ、遠くかまえて見込みしおらしく立てるなり。

洞というは、流枝と前置の間ゆるやかに、上より下草なびき、奥もの深きところなり。水ぎわ一方せまりたる時は、一方かならず洞をかまえ、しおらしき花などかすかなる様に立てるなり。

つや 並びに あしらいの事

つやと云うは、幹太くこわごわしき物には美花美葉のやわらかなる物を外よりそえ、又は内よりたよらせて立てる時は、するどなるものもやわらかに見え、けやけきものもいやしからず見ゆるなり。これ立花第一の教えなり。あしらいと云うは、葉のなきものには葉ある物を取り合い、丸きものにはほそきもの、かろきものにはおもき物、かたき物にはやわらかなる物、きおいたる物にはなびきたる物、すぐなる物にはまがりたるもの、この外あまたあるべし。

古代は七つの枝の外を皆あしらいと名付く。初心は一草をもってつやとし、一木をもってあしらいとす。巧者にいたりては、一草をもってつやあしらいの二つをかね用いるなり。

意気の事 並びに うつりの事

意気と云うは、心を勢いあるように立て、そのうつりを請によくうつし、両方へ楽に張り合い、竜虎の如くなるを云う。これ上は心請より、下は水ぎわに至るまで、この心得をもって指す

なり。師語をもって教う。意気あるは則ち意気に添う。うつりと云うは、一方に曲がりたる物を立て、一方にはそのうつりを請けて直なる物を立てる。意気うつり同じ意なり。

張弛の事

張弛とは、草木地より発生して、勢いつよき姿を云うなり。一草一木、一花一葉の上にてこれを云わば、魚の池に躍るがごとし。草木花葉対用してこれをいわば、波岸に当て立てるがごとし、よくよく修練してこの位を指し得るを名人と云うべし。

立花色の事

師に問う。立花色と云うはいかなる所を云うや。師の曰く、これ花道の奥義、出生玄妙体を瓶にうつすを仮に名付けて色と云う。その玄妙体とはいかなる所を云うや。師の曰く、柳は緑、花は紅。問うて曰く、いかがして指し得べきや。師語りて曰く、草木我が心にまかする時は工に貪著するゆえ、必ず出生の景気得がたし。また我が心草木にまかせて念慮なく、植に生ずるは植に、横に生ずるは横に遣う時は、草木自然の体、顕なるべし。槖駝曰く、古文「以能順木之天以致其性焉爾（以て能く木の天に順ひて、以て其の性を致すのみ）」この語花道の奥義によく相叶えり。誠に微細の教導、向上の一路なり。この境をよくよく工夫して修練止まざるときは、覚えずして色あるべし。

槖駝＝植木屋、庭師。古文は柳宗元の「種樹郭槖駝傳」の引用。

基本花型にいける

＜9頁の花＞　仙溪

主材　ユーカリ（フトモモ科）
副材　ストック（油菜科）
　　スプレー菊（菊科）
花器　粉引陶水盤（伊藤典哲作）

ユーカリのシルバーグレーの葉色には鮮やかな色の花がよく似合う。スプレー菊のワインレッドとストックの淡いピンクが、ユーカリを背景にしてモダンに鮮やかに見える。

花型は斜体副主型を選び、ユーカリの長い枝が副の位置に伸びて。真、副、胴にユーカリが広がる感じにいけている。

ユーカリの次にストック、スプレー菊の順に入れていく。その時じゃまになる小枝は切っておき、最後に水ぎわや奥行きに加える。ストックの足元にも小枝をさして温かな感じにしておくといい。

斜体副主型（逆勝手）

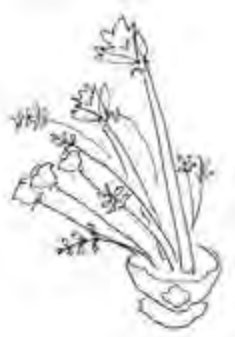
横から見たところ

紫葉アカシア

＜10頁の花＞　仙溪

枝先の葉が紫色になるアカシアが、花以外の時季に切り枝で売られるようになった。微妙な色あいが写真では分かりにくいが、金属的な渋い輝きは冬のいけばなに独特の深みを与えてくれる。

花材　紫葉アカシア（豆科）
　　アイリス（彼岸花科）
　　薔薇（薔薇科）
花器　洋陶スープ鍋



横から見た、いけばなの奥行き。

レモンちゃんと椿

カトレア

＜11頁の花＞　櫻子

徳島県の蘭栽培園からカトレアをいただいた。カトレアは栽培が難しく、また切り花は花だけが切られるのでとても短く、いけるのにはカトレアホルダーが必要となる。

いただいたカトレアはバルブ（親茎）つきで立派な葉もついている。大変貴重なものなのだ。

カトレアの色が映（は）えるように、濃紺のガラス花瓶と南京櫨の白い実を選んだ。

見事な大輪の鮮やかさは、まさしく蘭の女王だ。

花材　南京櫨（燈台草科（とうだいぐさ））
　　カトレア（蘭科）
　　ミリオクラダス（百合科）

花器　濃紺ガラス花瓶（コスタボダ製）

横から見た奥行き

陰陽五行

原初、宇宙は「混沌」たる状態であったが、その中から「陽」の気が上昇して「天」となり、次に「陰」の気が下降して「地」となった。この陰陽の二つの気は、元来が混沌という一気から派生したもので、いわば同根の間柄であり、ゆえに互いに引き合い、親密に往来し、交換・交合する。この

・天地同根
・天地往来
・天地交合

の三つが陰陽五行の根本原理になっている。

この根本原理を云いかえるとこういうことだろうか。もともとぐちゃぐちゃに混ざり合った澱んだ状態であったものが二つに分かれた。一つは「陽」の性質をもち、一つは「陰」の性質をもつものである。そうするとそこに、それら二つの相反するものの間を巡る流れが生じて、活発な循環が行われるようになった。さらにはこの両極のものが交わることで新たなものを生み出すことにもなった。

なんとなくイメージできただろうか。現実に置きかえれば、動物も植物もその命はこの両極の交わりによって生まれ、この両極を巡る流れがその命を育み活発にさせている。そしてその両極の根は一つ。ふむ。次回はこの両極の性質、陰と陽について掘り下げてみよう。

桑原専慶流いけばなテキスト631号　2016年1月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出逢い花（26）

仙溪

桐（きり）（桐科）
薔薇（ばら）（薔薇科）

黄な粉をまぶしたように見える暖かそうな桐の蕾が好きだ。春には高貴な紫色の花がこの中から生まれ出てくるのだから、自然のなんと不思議なことだろう。この蕾たちの子守役に深紅の薔薇を添えた。

花器　金箔散らし漆花器

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
2月号
No.632

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

「新たな気づき」

花道において、大師範の先生方がいける花には、なんともいえない雰囲気があるもので、それは、その人それぞれにご自身の経験から得てこられた、その人ならではの「気づき」の積み重ねが自然に出てくるのだと思う。

それに倣って一つでも多くの、素敵な「気づき」を得られますように、というのを、この一年のテーマとしたい。

黒芽柳とアマリリス

＜2頁の花＞　仙溪

花材　黒芽柳（柳科）
　　アマリリス（彼岸花科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花型　盛花
花器　陶花器

黒芽柳は猫柳の突然変異で生まれたと考えられている。

明るい洋花との相性がいい。

横から見た奥行き

クロコダイルファーン

＜3頁の花＞　櫻子

花材　クロコダイルファーン
（裏星科）
カザリシダ（裏星科）
ガーベラ（菊科）
花型　盛花
花器　陶コンポート

羊歯の仲間を2種類一緒にいけてみた。後ろに2枚左右に立てたのがクロコダイルファーンで、まさに鰐皮のような凹凸がある。手前2枚と後方に入れたのがカザリシダの一種で、尖った葉の付き方が左右交互にギザギザに付いていて格好いい。クロコダイルファーンだけだと夏向きのいけばなだが、濃い緑色のシャープな形のカザリシダを加えることで、冬の部屋にもしっくりと馴染む。

観葉植物の葉を2種組み合わせることで、表現できる雰囲気というものもあることに気付いた。今後もいろいろ試してみたい。

横から見た奥行き

木蓮（もくれん）

仙溪

花材　木蓮（木蓮科）
花型　生花　草型　副流し
花器　銅砂鉢

昨年3月の京都東山花灯路いけばなプロムナードにいけた木蓮の生花。

いけた時は蕾の先に紫の花色が見え始めた頃で、暖かそうな産毛（うぶげ）の生えた芽鱗（がりん）をいくつか剥（は）がして見せていたが、会期を終えて自宅に飾ってから数日後にはほとんどの花が産毛を脱いで春爛漫となってくれた。

早春の白木蓮（はくもくれん）は高木になるが、少し遅れて咲く木蓮（紫木蓮（しもくれん））は低木。どちらも中国原産の花木で、単にモクレンと呼ぶのは紫木蓮とも呼ばれる紫色の方だ。

モクレン属の祖先は約1億年前に誕生したことが化石から分かっている。地球上で最古の花木と考えられ、花木類の祖先にあたるそうだ。人類誕生以前から咲き続けている花。木蓮の開花は、地球の春の産声（うぶごえ）なのかもしれない。

山茱萸（さんしゅゆ）

＜表紙の花＞　仙溪

花材　山茱萸（水木科）
花型　生花　草型　留流し
花器　煤竹竹筒

山茱萸は中国、朝鮮半島原産の落葉小高木。早春、枝の先に小さな黄色の小花が集まって咲き、秋にはやや細長い赤い実が枝にぶらさがる。

山茱萸の稽古をすると、「庭のサンシュの木、鳴る鈴かけて～」と歌われる民謡、稗搗節（ひえつきぶし）を懐かしく思い出される方がときどきおられる。今はインターネットで簡単に視聴することができるので探してみると、この歌のサンシュの木は山茱萸ではなくて山椒の木だった。

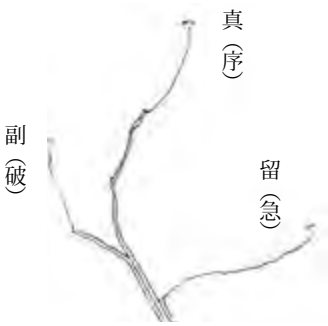
山椒の木に鈴をかけ、その鈴が鳴ったら家から出ておいで、と歌う。日向地方の方言では山椒のことをサンシュと呼ぶのだ。

九州宮崎県椎葉村には、その昔、源平の合戦で敗れた平家（へいけ）の落人（おちうど）が住みついた。それを知った頼朝の命を受けて、落人討伐のためにやって来た那須大八郎は、平家の鶴富姫と恋に落ちる。姫の屋敷の山椒の木にかけた鈴が、二人の密会の合図になった。そんな恋話の歌を歌いながら、稗（ひえ）を搗（つ）いた。まさに、その土地の歴史と文化を感じる生活のひとこまだ。

さて、山茱萸（さんしゅゆ）。日本に来たのは江戸時代中期に薬用として種子が持ち込まれた。実が茱萸（ぐみ）（茱萸科（ぐみ））に似るのでこの名がある。山茱萸の実は食べられる。強壮薬として煎じて飲んだり、果実酒にしたり。熟した実を熱湯につけ、種子を取り除いて日干しにしたものが生薬となる。

いけばなでは春の花材として重用される山茱萸だが、木に粘りがあるので少々きつく撓（た）めても折れてしまわない。節を避けて、太い幹は切り撓め、細い枝は捻（ねじ）り撓めで形をつける。

蕾でいけたあと、部屋で花が咲いてゆくのはいいものだ。花の色が春を感じさせてくれる。



陰陽五行

陰の気、陽の気と云うが、そもそも「気」とはなんだろう。「生命・意識・心などの状態や働き」「天地に生じる自然現象」「あたりに漂う雰囲気」などと説明されるが、要するに様々な「状態」「働き」を「気」ととらえることができる。

ものの状態や働きはその性質が強いときもあれば、弱い時もある。さらに極まって逆の状態や働きに転じたりもする。単純にこれは陰、これは陽というふうにすべてを二つに分けておしまいではなくて、陰的なものの作用と、陽的なものの作用を知って、それらの調和と、その間にどんな流れが生じるのか、それらが交わって何が生まれるのか、という事象の理解が重要となる。

陰と陽、この二気の働きによって万物の事象を理解するのが陰陽思想なのだ。森羅万象（しんらばんしょう）、宇宙のありとあらゆる物は、相反する陰と陽の二気によって消長盛衰（しょうちょうせいすい）し、陰と陽の二気が調和して初めて自然の秩序が保たれると考える。

陰と陽のそれぞれの性質を表にしてみよう。

陰	陽
遠心力	求心力
膨張、拡散	収縮、融合
上昇	下降
軽い	重い
暗い	明るい
湿潤	乾燥
柔らかい	硬い
冷たい	熱い
穏やか	活発
地	天
月	太陽
冬	夏
夜	昼
女性	男性
偶数	奇数

立華時勢粧を読む ⑳

立花秘傳抄　五

立花名目　並びに　訓解（つづき）

貫枝の事

高木高草は左右へぬくべし。小木小草は水ぎわたりといえども、後ろよりぬくべからず。また高木たりといえど、副、請と両方に遣う時はその中につたいの枝を指してよし。

心の後ろより幾色もぬく時は、もぢれ枝とて縁のきれる事あり。古人云う、重山重山とぬくべしと云えり。たとえば扇をひろげて重ねたるがごとく、一とおり一とおりもぢれざるように立つべきなり。

除真の時は後ろより草をぬくもあり。又ぬかざる流もあり。草の心の時はぬくべき事勿論なり。木の心にもぬきて苦しからず、立て様あるべし。されば山峡に池あるあり、林辺に野を見るあり、その体数多くあり。

語りて曰く、

「雖為沢辺千丈松　不似嶺頭一寸草」

古歌

夏山の　草葉のたけそ　しられけり
去年見し小松　ひとしなければ

立花秘傳抄の五　終

【テキスト６１２号　内容の訂正】
真行草の図（の５行目）
・・・古人松を切り花を折って・・・

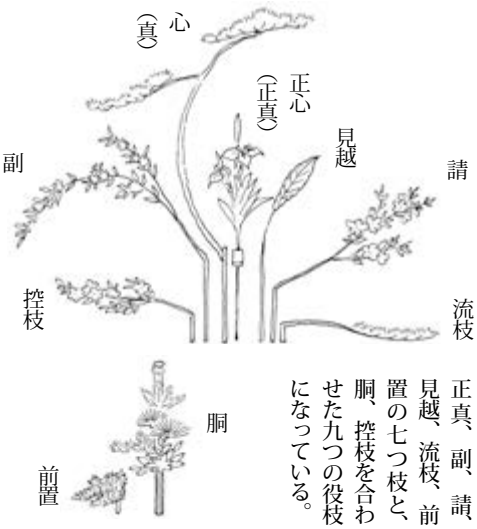
※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）

「立花秘傳抄五」の後半には「立花名目、並びに訓解」という、立花を実際に立てる上での役枝の考え方が書かれている。すでに掲載した立花図の一つで、骨格となる役枝がどのようになっているのか図解してみる。

立花の名目（役所の呼び名）

第八十二図　除真立の内真の花形　高橋吉兵衛
松　山吹　躑躅　杜若　柘植　熊笹　小菊
要　柏　檜扇

役枝の分解図（器の口から上）



現在では、真、正真、副、請、見越、流枝、前置の七つ枝と、胴、控枝を合わせた九つの役枝になっている。

橐駝（たくだ）について

前号「立花色の事」にある「橐駝」について書かれた中国古書「種樹郭橐駝傳」は誠に興味深い内容なのでここに紹介します。

小林益夫氏の「風幡亭雑記帳」より転載。原文は「新釈漢文大系71　唐宋八大家文読本（二）　星川清孝著　明治書院」

「種樹郭橐駝傳（しゅじゅかくたくだでん）」

柳宗元（773～819）

通釈

郭橐駝（かくたくだ）は、そのはじめは何という名であったか分からない。背の曲がる病気で、背がもり上がってうつぶしになって歩くのが、駱駝（らくだ）に似ているところがあるので、それゆえ郷の人は駝（だ）と呼んだのである。駝はこれを聞いていった、甚だ（はなは）善い。私を名づけてまことに当たっている、と。それによって彼は自分の名を捨てて、彼もまた自分で橐駝（たくだ）といったということである。その郷を豊楽郷という。長安の西にある。駝は樹を植えることを仕事としていた。およそ長安の豪族や金持ちで物見遊山の庭を作る者や、果実を売る者などは、皆争って駝を迎えて彼の培養と視察とを請うのであった。駝が植えた所の樹は、遷（うつ）し易（か）えることがあってもよく根がつき活きて、大きくなり茂って、早く実がなり殖（ふ）えないものはなかった。ほかの植木をする者が、うかがい見て見習い慕っても、それに及ぶことのできるものがなかった。これを尋ねるものがあると、彼は答えていう、橐駝は木を生命長く、その上茂らせることができるのではない。木の天然自然に従って、その生まれもった生きる働きを導くことができるだけである。およそ樹木の性は、その根本はまっすぐに伸びるようにと欲し、その土をかけ養うことは平均していることを欲し、その土壌はもと植えてあったものであることを欲し、その根本の土を固めるには密ですき間のないことを欲するのである。すでにそうしてしまうと、あとは動かしてはならない。心配もしてはならない。そこから立ち去ってあとは二度と振り返り見ないがよい。その植える時は子を育てるときのように大事にし、植えて手放すときは棄てるようにすれば、その木の天性はそこなわれず完全で、その生きる働きが、適切に行われるのである。それゆえに私はその成長を害しないだけであって、それを大きくし茂らせふやすことができる力があるのではない。そのなる実を抑えへらすことをしないだけであって、それを早く実らせ多く殖やすことができる力があるのではないのである。

ほかの樹を植える人はそうではない。根は拳のようにかがまって土は前と変わり、その土を寄せ養分をやるのに、もし度を過ぎるのでなければ足りない。かりそめにも是に反して良くやっていても、また木を可愛がっていつくしみが過ぎ、心配して熱心が過ぎて、朝に良く見ては暮れに撫で、もはや立ち去ってからまた振り返り見る。甚だしいのはその木肌に爪を立てて生きているか枯れたかを験（ため）してみ、その根元をゆり動かして土にすきがあるか密につまっているかを調べてみる。そうして木の生きる働きは毎日離れて行ってしまう。これを愛しているというけれども、その実はこれを害している。これを心配するというけれども、その実はこれをいじめているのである。それゆえに私には及ばないのである。私はその上何ができようか。何もできないのである、と。

問うものはいった、お前のやり方を、役所の政治に移して行うことができるだろうか、と。駝はいった、私は植木のことを知っているだけである。政治は私の仕事ではない。しかし私は村里に住んで人の長であるものを見ると、好んでその法令を面倒にして、大変人民を憐（あわ）れんでいるようでありながら、結局人民に禍（わざわい）をしている。朝に晩に役人が来てさけんでいう、役所の命令で、お前たちの耕すことをうながし、お前たちの作物を植えることをはげまし、お前たちの収穫を監督する。早くお前たちの糸を繰れ、早くお前たちの糸を織れ、お前たちの幼児を育て、お前たちの鶏や豚を十分に成長させよ、と。鼓を鳴らして人民を聚（あつ）め、拍子木を撃って呼びつけるのである。私たち農民は食事をやめて、それで以って役人をねぎらいもてなすのですらも、また暇がないのである。その上どうして自分たちの生活を繁昌させて、自分たちの生きるための心の働きを安全に保とうか。とてもできるものではない。それゆえ、病んでその上仕事を怠ってしまう。このようであれば、政治も私の仕事と、それこそ似ているところがあるのであろうか、と。問うものは喜んでいった、それも善いではないか。私は樹を養うことを尋ねて、人を養う術がわかった、と。このことを書き伝えて、それを役人のいましめとするのである。

（橐＝袋のこと。橐駝（たくだ）＝ラクダの正名。）

7

臘梅の立花　「冨春軒初春の会」　仙溪

花型　除真立　行の花形
花材　臘梅（臘梅科）
　　松・五葉松（松科）
　　水仙（彼岸花科）
　　万年青「残雪」（百合科）
　　椿（椿科）
　　枇杷（薔薇科）
花器　銅立花瓶

立派な臘梅だった。真に2本、請に1本。元の姿のまま花器に立ててこの姿になった。蠟梅とも書くが、私は臘月（十二月）の臘を使っている。

「残雪」という斑入りの万年青で前置をつくった。「万年青の前置」は立華時勢粧にも出てくるが、いつか納得のいくいけ方ができるようにしたい。

大きな枇杷の葉を副にしたが、図で控枝と書いた松を副と見なしてもいい。

ロームシアター、冨春軒初春の会、イケバナインターナショナル・デモンストレーションと、3カ所でご覧頂けたことに感謝している。

古書に習う

7頁で紹介した「種樹郭橐駝傳」は、流祖が書き記してくれたことを辿って知ることが出来たわけだが、誠に含蓄のあることが書かれている。三二八年前の流祖のメッセージを受け取ったみたいな、不思議な思いがしている。さらに、たまたま新潟の庭師さんがこの古書の紹介をされていたお蔭もある。世の中には知らないことがなんと多いことか。でも、求めていれば、きっと新たな出逢いや気づきが得られるのだ。

白梅の立花

「冨春軒初春の会」

挿花　川瀬慶裕

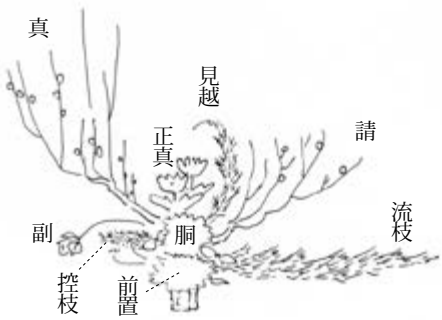
花型　除真行の花形

花材　白梅（薔薇科）
　　這柏槙（檜科）
　　菊（菊科）
　　白玉椿（椿科）
　　小菊（菊科）

花器　陶コンポート
　　（宇野仁松作）

白梅と這柏槙で調子を整えた、横張の立花である。

花器に色があるので、敢えて色数を抑え、白梅の品格を引き出した。



松と山茱萸（さんしゅゆ）の立花

「冒春軒初春の会」

挿花　米山慶嘉

花型　除真立　行の花形

花材　松（松科）

山茱萸（水木科）

椿（椿科）

菊（菊科）

小菊（菊科）

枇杷（薔薇科）

花器　陶花瓶

真（しん）の松の出口を低くして、請（うけ）の山茱萸の出口を高くした。真の梢が中心より右へ出る時は、左流枝といって流枝を左に出すこともあるが、真の松の幹が太いので、流枝は右へ出してバランスをとっている。

流枝の屈曲した枝と副の伸びやかな枝の対比が見所になっている。

桑原専慶流いけばなテキスト632号　2016年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

バンダとカーネーション

櫻子

先日雪柳とバンダをいける機会があった。枝の姿が自由に広がる真っ白な雪柳と濃いピンク色のバンダを取り合わせると、今年の満開の桜を思わせるように華やかに。

バンダは、東南アジアやオーストラリアで育つ蘭で、樹木や岩肌に根を張り付けさせて伸びていく着生植物である。上へ上へと伸びて大きな姿になる。野生の原種を原産地で見てみたいと思うような花だ。

長く伸びた気根から空気中の水分を吸ってくれるので、花器に収めずにそのままの姿を飾ることもでき、時折霧吹きで水をかけてやると立派な姿で美しく花を咲かせた。

花会が終わった後も家に持ち帰り、飾っているが、途中で花茎から折れてしまった花を食卓に。小さな姿になっても、花器の水が新鮮で澄んでいれば生き生きしてくれている。

元気のないときに、この花を見ると気持ちが晴れやかになるのは、きっとこの花が美しい鳥が飛び交う樹林の緑と強烈な太陽の輝きを想像させるからだと思う。

花材　バンダ2種（蘭科）
　　カーネーション（撫子科）
　　手球草（てまりそう）（撫子科）
花器　アンティーク・ガラス花器

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
3月号
No.633

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

ミモザとアネモネ

＜2頁の花＞　仙溪

花材　ミモザ（豆科）
　　アネモネ（金鳳花科）
花器　ブルーガラス花瓶

アネモネの鮮やかな花色が好きだ。特に赤色。アネモネを眺めていると、アートの世界に誘われるような感覚をおぼえる。それは絵の具のようにくっきりとした花色のせいなのか、花弁が美の女神の衣のように見えるためか、うまく云えないが不思議な魅力をもっている。

風の花という意味を持つアネモネは、春の太陽のようなミモザと合わせると、なんともいえない表情になる。

ミモザ（正確にはフサアカシア）はオーストラリア原産だが、南仏ではミモザ祭があるくらい特に愛されている。そんなミモザとアネモネは、まるでフランス印象派絵画のような組みあわせだと思う。

横から見た奥行き

春の草花

＜3頁の花＞　櫻子

花材　薇（ぜんまい）（薇科）
　　ラッパ水仙2種（彼岸花科）
　　スイートピー（豆科）
　　青麦（稲科）
花器　小判型陶水盤（伊藤典哲作）

春先になるとよく使う食器に乾山（けんざん）写し春草紋向付（むこうづけ）というのがある。スミレやワラビ、ツクシが描いてあって色絵の焼きものではないのに、その器に春のお料理を盛るとぱっと華やかで美味しそうに感じられる。

いけばなでもゼンマイやムギを添えるとほのぼのとした春の暖かさを感じるような季節感あふれる花になる。

実際に里山に行きゼンマイやワラビ、コゴミなどを摘むこともないし、自然の中ではその区別にも自信がないが、やっと訪れた待ち遠しかった春を料理でも花でも実感したい。

横から見た奥行き

二つ並べる

＜4頁の花＞　仙溪

花材　雪柳（薔薇科）
　　チューリップ（百合科）
　　菜の花（油菜科）
花器　陶水盤（伊藤典哲作）

稽古でいけた花を二つ並べてみた。それぞれ小さめにいけているが、置く間隔を工夫すれば、この調子で幾つでも増やして飾れそうだ。雪柳には自由に広がる動きがあるので、このような楽しみ方もできるのだろう。

横から見た奥行き

桃とアナスタシア

＜表紙の花＞　櫻子

花材　桃（薔薇科）
　　菊　品種名アナスタシア
　　（菊科）
花器　飴色釉陶壺

桃といえば菜の花と取り合わせる事が多いが、今回はアナスタシア（大輪菊）といけてみた。

アナスタシアは一年中出荷されているようで、見慣れているけれども毎回その見事な咲き方には驚く。満開の状態で出荷されるので花が痛まないように一つずつネットで包んで守られている。固い蕾から咲く菊とは随分イメージも違うが、日持ちはそれほど変わらない。

おお振りで伸びやかな満開の花桃にも負けない力強さだ。桃の花がアナスタシアと美しさを競い合って、より美しく感じられる。

横から見た奥行き

新聞の上で瞑想するレモンちゃん

立華時勢粧を読む ㉑

「立花名目並びに訓解」解説

「立花名目並びに訓解」では、立花の構成について誠に詳しく述べられている。実際には主になる九つの役枝（元は七つ）とそれ以外の部分について、経験を積みながら理解を深めてゆくことになる。

役枝その他の役割を簡単に説明する。

心（真） は一番高く立つ。除心は梢を正心の上に戻すのが常で、戻さない時もある。

正心（正真） は直心立では心の前に立て、心隠とも呼ぶ。除心立では中心に直立する。

副 は高く心に添い上り、心に勢いを持たせる役目。

請 は心の勢いを受け持つ役目。副とは対照的につくる。

見越 は遠くの高木を眺める心で。前置との釣り合い、正心との映りを考えて作る。除心の見越は左右高下を自由に作ってよい。

流枝 は水際低く横へ（長く）流れるように。瓶の後ろ隅より出し、前置より前へ出ない。

前置 は花形の要、草木の根締め。水際の正面に長く出すのが真の前置。行、草の前置もある。ここまでが七つ枝。

胴 は瓶上の景所。縦横左右前後の大枝を育てる所。

控枝 は副の下。他との釣り合い。無しも可。

腰 は流枝、控枝の後ろ。心との釣り合い。

水際 は夏高く、冬低く。

かこい で見苦しい所を囲い、景色も作る。

谷洞 谷は胴の後ろ、正心の前。洞は流枝と前置の間。

つや は外より添え、内より頼らせて立て、強々しいものを柔らかに見せる。

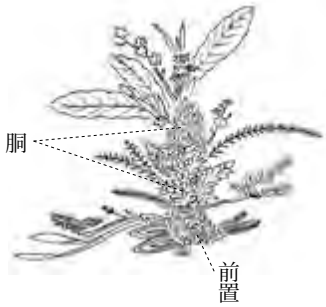
あしらい は役枝に足りない要素を補う役目。

絵図を参考にして、直真立、除真立、一株砂物で、主な役枝とそれ以外の部分がどのように作られているのか見てみよう。

第一図

真の花形の主な役枝の図解（器の口から上）

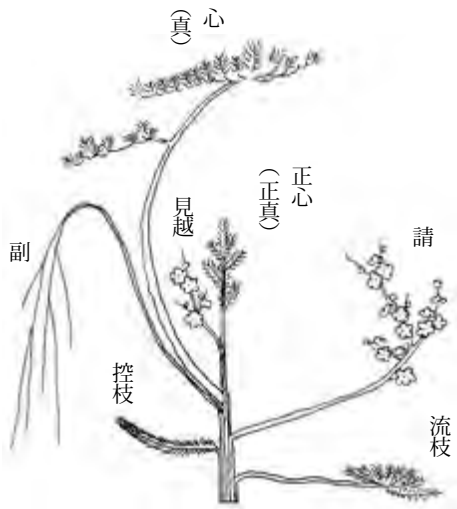
胴作りと前置
その他（水際、かこい、谷、洞、つや、あしらい）



第二図

行の花形の主な役枝（器の口から上）

請を際立たせるために見越を左後ろに出している

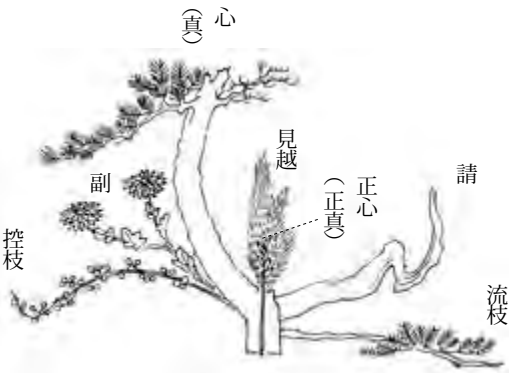


胴作りと前置

その他（水際、かこい、谷、洞、つや、あしらい）

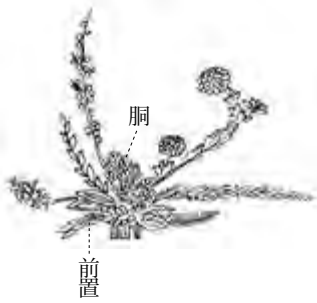
第三図

草の花形の主な役枝（器の口から上）



胴作りと前置

その他（水際、かこい、谷、洞、つや、あしらい）



三つの立花図の花材名は「テキスト612号」に掲載しています。

桜一色立花　（写真②）　仙溪

いけばなインターナショナル京都の例会で実演

烏丸ビルエントランスロビーに展示（上の写真）

先月号で紹介した槖駝（たくだ）さんの言葉。

「木の天然自然に従って、その生まれもった生きる働きを導く。」

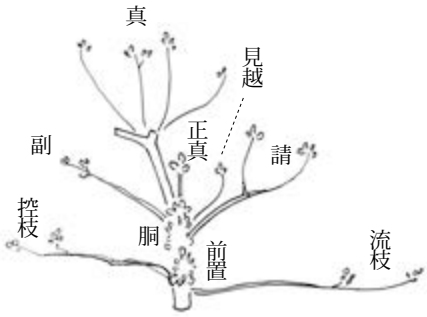
という境地に近づきたくて、河津桜の大きな枝を手に入れて、桜一色立花を立ててみた。ただし枝はほとんど撓（た）めずに、針金を一切使わずに、全ての枝をただ込藁（こみわら）に挿すだけ。枝の足元を細く長く尖らせると、針金で括（くく）らなくても、自然に真っ直ぐ立ってくれた。

このような立て方は、デモンストレーションで立花を立てるところを見てもらう場合にも向いている。立花を鑑賞する時に針金が見えたのでは興ざめするが、実演においても、技術の解説のためならいいが、美しく立ててゆくなら、ただシンプルに込藁に挿してゆくだけで完成するのが理想的だと思う。

さて、出来映えとしては反省点も多いけれど、立て終えた時の花との一体感は新鮮な体験であった。

この桜の立花はビルのエントランスに飾らせて頂き、その後満開に咲いてくれた。いけた花が美しく咲いてくれることが、一番の喜びである。

花型　除真
花材　河津桜
　　（薔薇科）
花器　銅立花瓶



ビルのエントランスに飾った桜一色立花を横から見たところ。

山茱萸の立花

仙溪

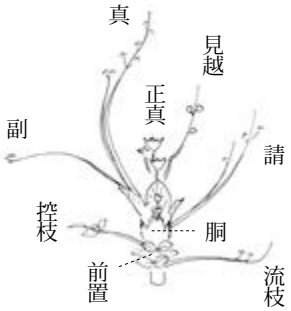
立花研修会の花

花型　除真

花材　山茱萸　木瓜　椿　菊
　　黒芽柳　小菊　枇杷

花器　陶花瓶（矢野款一作）

請の枝にもう少し変化をつけて、枝先も低くすべきだったと考えている。



椿の生花

仙溪

京都名流いけばな展出品作

花型　草型　副流し
花材　薮椿（椿科）
花器　銅薄端（うすばた）

背丈くらいある薮椿の大きな1本の枝。枝の曲がりや位置を目で追ってゆく。どこで切って、どこで撓めればいいか。いけ上がりの大きさはどうか。個性的な枝を生かすことができるか。

椿で思い出すのは丹後の千年椿とドイツ・ピルニッツ城の椿。どちらも自由奔放に枝を伸ばしているのがいい。千年椿から感じるのは自然の凄み。一方のピルニッツの椿は樹齢250年だが、冬の寒さで枯れないように、巨大な可動式温室で大切に守り育てられてきた。どうか次の年も花が咲いてほしいと願う人の思いの凄みを感じる。

自然と人の思い。この二つからいけばなは生まれる。

桑原専慶流いけばなテキスト633号　2016年3月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出逢い花（27）

仙溪

猫柳（柳科）
チューリップ（百合科）

テーマは「春の光」。

八重咲きの個性的なチューリップを見つけたので、春を感じる枝との出逢いをいけようと決めた。

花屋には桜、連翹など、春の花木が並んでいたが、花穂のふくらんだ猫柳の一枝に目が止まった。

「出逢い花」をいける時に自分で決めていることがある。2種類の花材を選ぶのに、それぞれ必ず1本と1本の出逢いでいけること。なので、これと思う花や枝を吟味して選んで買わせてもらっている。

この猫柳は長い枝の先で写真のように枝分かれしていた部分を切っていけている。短くいけることで、綿毛の柔らかな光を身近に感じられて、より愛着がわく。チューリップも花と葉を切り分けて、小さく小さくいけている。

春の柔らかな光を感じる器は何にしようか。小さな枝と花をより輝かせてくれる器。チューリップの個性的な美しさと釣り合うモダンなデザインの器。そうだ、あれがあった。

ガラスの小鉢に丸剣山で花をいけて置くと、美しいお皿も花器になる。あとはうまく剣山を隠せるかどうか。

花器　現代織部陶皿（柳原睦夫作）
ガラス小鉢

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
4月号
No.634

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

出逢い花（28）

〈表紙の花〉　仙溪

木蓮（木蓮科）
鈴蘭（百合科）

とある美術館のミュージアムショップにあった小鉢?。「出逢い花」に使おうと買い求めていたので、その器に似合う花を花屋で探すことになった。

この木蓮の高さは29㎝。大きな枝の脇枝を切ってもらったものだ。鈴蘭は12㎝ととても小さく、根付きで売られていた。

器の水玉模様と鈴蘭の可愛らしさ、木蓮の色と動きが一体となって、おとぎ話のような花になった。

花器　陶茶盌（山口由次作）

エピデンドラム

〈2頁の花〉　櫻子

花材　エピデンドラム4色（蘭科）
スイートピー2色（豆科）
玉羊歯（蔓羊歯科）
花器　粉引陶水盤（伊藤典哲作）

色鮮やかなエピデンドラムを伸びやかに出して、スイートピーは水際近くに前方へ集めるようにいけている。広がるものと集まるもの。この対比がいけばなに躍動感を与える。

ピンクの濃淡と紫の濃淡。そこに

黄色を効かせて。淡い春の花色で絵を描くようにいけた。

横から見た奥行き

キンクサリ

＜3頁の花＞　櫻子

花材　金鎖（きんくさり）（豆科）
　　ギガンチウム（百合科）
花器　ブルーガラス花瓶
　　（ヨーラン・ヴァルフ作）

大好きな花の一つ、キンクサリ。ヨーロッパ中南部原産で藤に似た黄色い花が房状に垂れ下がる。寒冷地ではかなり大きく育つそうだ。安定のいいガラス花瓶に挿して紺色のバックに置くと、黄色い花が鮮やかに浮かび上がった。

キンクサリには十分な葉がついていたので、相手には大きな紫色の玉のように咲くギガンチウムを2本選んだ。反対色の紫色が黄色をさらに印象的にしてくれた。

枝の姿に添わせる

主材　小手毬（こでまり）（薔薇（ばら）科）
副材　薔薇（ばら）2種（薔薇科）
花器　陶花瓶

今年は奈良のお水取りが終わる頃、白木蓮、山茱萸、雪柳の花が一斉に咲き始めた。小手毬はそれらに少し遅れて咲き始める。

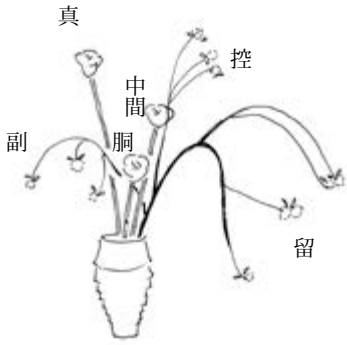
小手毬は中国原産の落葉低木。江戸時代のはじめには庭木などに利用されており、「立華時勢粧」にも名前が見られる。ちなみに雪柳も小米花の名前で書かれている。

手毬のように集まって咲く花が枝垂れる姿は独特の風情がある。その特徴を生かした花形を心がけたい。

・上下に枝が分かれている時は二つに分けて使う。
・上方に枝が集まっている時はそのまま使う。
・そのまま使うが、一部の枝を切って挿しなおす。

以上のような3通りのいけ方が考えられる。枝の姿にあわせていけ、添える花を臨機応変に挿し加えていく。

投入垂体留主型

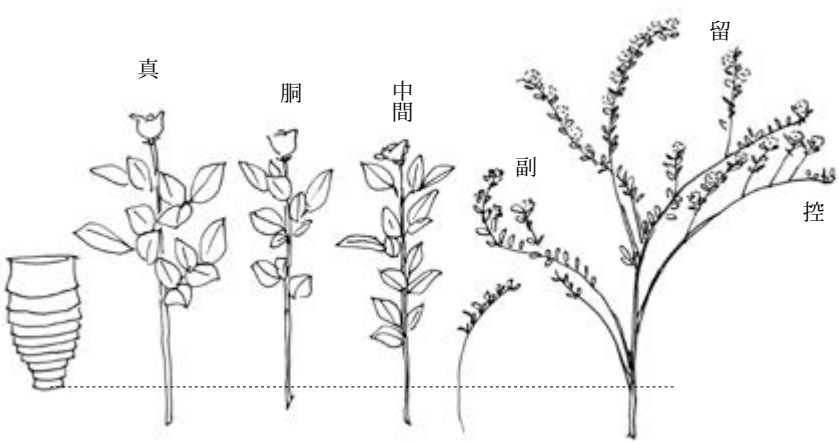


③　中間の位置に薔薇を加えたところ。小手毬の枝に添わせて入れている。枝と枝の間に薔薇の葉を注意深く広げてゆく。最後に真に薔薇を加える。（４頁の花）

①　まず主材の小手毬を自然な姿に持ってみて、そのまま使うか、切り分けるかを考える。作例では三方に広がる姿をそのまま生かすことに決め、留に主枝を出した。

④　右横から見た奥行き。

②　胴の位置に薔薇を挿したところ。薔薇は充分水揚げをしておき、葉の綺麗なものを前方に使うようにするといい。



それぞれの長さ。主材の長さは、花器の幅と高さを足した長さの1.5～2倍を目安にして、水の中の深さを加えて切る。

立華時勢粧を読む　㉒

ここまで巻一、巻七、巻八の記述を紹介してきた。巻二、巻三は絵図のみなので、残る巻四～六にあたる「立花秘傳抄一～三」に書かれた花材解説について紹介してゆく。

立花秘傳抄　一

常磐木之部

木

説文に曰く、木は冒なり、地を冒して生ず。以て上は屮、下はその根を象る。又曰く、木の性上の枝左右へはびこること一丈なれば、下の根も又土中にはびこること一丈。これ故に文字に書く時も上下同じくはびこるかたちなり。

枝

音は支、則ち四支なり。誠に人の手足あるが如くなり。柯は大枝を云い、朶・條は小枝なり。日本記には末をえだと云えり。

株

土の中に入るを根と云い、土の上を株と云う。砂物にこれを用いる。

気条

唐詩に見る。

蘖

纂要曰く、切って又生ずるをひこばえと云い、俗に云うわかばえなり。

葉

字彙に云う、奕葉また累葉などと続く字なり。皆世を重ねる心なり。また上艸に、下木にして、中に世の字をもつは、草木の葉が春は生じて冬落ち、或いは枯れてまた生ず。累年止むことなし。その理、世の春秋を重ねるに同じ。和訓に云う、葉は歯なり。人の歯有るがごとし。草木初めて生ずるに二葉を生じ、それよりまた気を出して枝葉花となるなり。

説文＝説文解字。後漢の許慎による漢字の字書。　屮＝草木の芽生え。　四支＝四肢。　纂要＝要点を抜き書きした書物。　字彙＝中国の漢字辞典。

光琳の「燕子花図」と冨春軒

京都美風シンポジウム　琳派紀行⑥

3月1日　烏丸京都ホテル

パネラー：近藤高弘　重森三果　桑原櫻子

京都商工会議所主催の「琳派」をテーマにしたシンポジウムに櫻子副家元がパネラーで参加させていただいたので、その折に副家元が話したことについて紹介したい。

・光琳と仙溪の接点

「立華時勢粧」が出版された貞享5年（元禄元年　1688年）当時、尾形光琳は30才。おそらく立華時勢粧のことを知っていただろうし、西本願寺の立花師である仙溪の立花を見ることもあったと思う。光琳が絵を描くようになるのは40才以降のことだが、初期の代表作「燕子花図屏風」の着想には、杜若だけで立てる「杜若一色立花」に何らかの影響を受けているのでは。光琳の燕子花図屏風はもともと西本願寺に納められたものだそうで、光琳と流祖・冨春軒仙溪の接点を想像するとドキドキする。

・琳派の気風

宗達、光悦から受け継がれてきた琳派の精神の核になるのは「古典を現代に生き生きと息づかせる」「美の本質を探究しつつ、新しい表現を開拓する」ことだと思う。その気風は初代の冨春軒仙溪からも感じる。

私の祖父・13世家元も「桑原専溪の立花」の中で次のように云っている。

「まず過去の名作をしっかり研究すること。しかも基礎となる伝統の技術をしっかり研究して、その上に今日的な作品に及ぶことが、何よりも必要なことと思うのである。伝統の中にありながら伝統にとらわれないように、そんな心を持っているので、作品にもそんな面が出るのではないかと考えている。」

新しいものを生み出そうとする情熱と、それを支える伝統の技の習得。このことこそ琳派の精神といえそうである。

「立花時勢粧」（1688年）より　杜若一色立花

乙女桜の立花

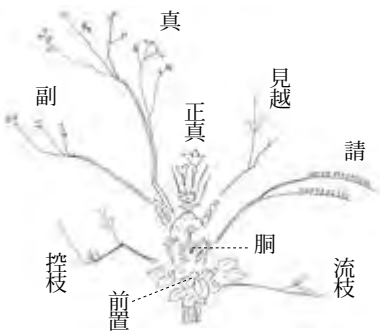
仙溪

立花研修会の花

花型　除心　行の行

花材　乙女桜（薔薇科）
山茱萸（水木科）
黒芽柳（柳科）
松（松科）
椿（椿科）
アイリス（菖蒲科）
枇杷（枇杷科）
小菊・スプレー菊（菊科）

花器　陶花瓶（伊藤典哲作）



横から見た奥行き

二種挿しの生花　仙溪

花型　行型　二種挿し
花材　黄金小手毬（おうごんこでまり）（薔薇科）
　　チューリップ（百合科）
花器　白釉花瓶

黄緑色の小さな若葉が可愛らしい。昔から京都の花屋ではサンザシの名前で売られていたが、黄金小手毬、または金葉（きんば）小手毬という名前の植物で、アメリカ手毬下野（てまりしもつけ）の仲間だそうだ。春の芽出し花材の一つである。

比較的撓めが効くので生花にもいけられるが、一種でいけるには少し寂しい。チューリップなど春の花をとり合わせて、一株で二種挿しにしたり、株分けや二瓶飾りなどにするといい。

留側のチューリップには、花が小さいもの、葉が丈夫なものを選んでいる。チューリップはぐんぐん伸びるので、時々切り縮めていけなおすようにしたい。

ドイツ菖蒲（あやめ）の生花　仙溪

花型　行型　三花五葉
花材　ドイツ菖蒲（菖蒲科）
花器　祥瑞（しょんずい）広口水盤

ドイツアヤメはジャーマンアイリスとも呼ばれ、ヨーロッパ、アメリカで多くの品種がつくられている。花色によって香りが違い、日本でも多くの花色を育てる人が増えてきた。イチハツの名前で出回るニオイイリスと葉がよく似ている。まだまだ出荷量は少ないが、今後いける機会が増えてほしい花材である。

桑原専慶流いけばなテキスト634号　2016年4月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

ラナンキュラス

櫻子

花材　連翹（木犀科）
ラナンキュラス8色（金鳳花科）
菜の花（油菜科）

花器　中近東手付花器

シャルロット、オーロラ、ハーマイオニー。ここにいけたラナンキュラスの品種名だ。さてどれがどれでしょう。

ラナンキュラスは地中海原産。花びらの枚数が多いのが特徴で玉のように大きく咲く。普通は単色なのだが、シャルロットは色の濃淡が絶妙だ。数年前から市場に出ており、値段も高いが花持ちもいい。

そして今年はじめて見たオーロラとハーマイオニー。どちらも花弁がフリル状に縮れている。

春の太陽のような連翹の太枝に8色のラナンキュラスを添わせ、葉が厚く茂った菜の花で水際を隠した。

微妙な花色の変化が、地中海の碧い海と空の色をした花瓶に美しく映える。

横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
5月号
No.635

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

カーネーション

〈表紙の花〉　櫻子

花材　カーネーション3色
（撫子科）
シーグレープ（蓼科）

五月で十五世家元襲名から十二年になる。その同じ年の八月に母が亡くなった。今も多くの人の思い出の中に母はいてくれる。お弟子さん達のいけばなの中にも母の教えは生きている。

「大切なことは何度も何度も言ってあげたらいい」繰り返し繰り返し、丁寧に指導していたが、私も同じことをしているようだ。そんなことを思いながら、優しい色合いでカーネーションをいけた。

横から見た奥行き

藤（ふじ）　牡丹（ぼたん）

〈2頁の花〉　櫻子

花材　藤（豆科）
牡丹（牡丹科）

花器　掛分釉大壺（清水保孝作）

藤の切り枝、牡丹の鉢。花屋で出逢った特別な花を、直感をたよりに

大きな壺にさらっといけた。藤も牡丹もめったにいけられない。どちらも水揚げが難しい。経験と判断力が要る花だが、いける度に自然の奥深い美しさに少し近づけたかなと思う。

横から見た奥行き

七竈（ななかまど）　芍薬（しゃくやく）　撫子（なでしこ）

＜3頁の花＞　仙溪

花材　七竈（薔薇科）
　　芍薬（牡丹科）
　　撫子（撫子科）

花器　青白磁花瓶（市川博一作）

みどりひときわ美しい季節。新緑の枝物に季節の花を添えることが多い。爽やかな風を感じる花をいけたい。

横から見た奥行き

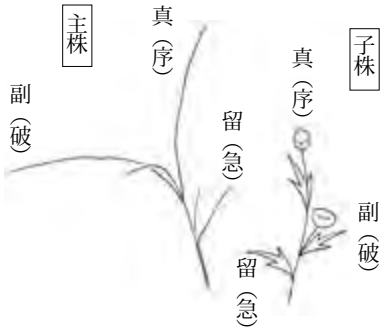
山吹（やまぶき）　芍薬（しゃくやく）

仙溪

花型　生花　株分け
花材　主株　山吹（薔薇科）
　　子株　芍薬（牡丹科）
花器　黒釉陶水盤

山吹は薔薇科・山吹属。切り枝では草花のような印象だが落葉低木である。黄色い花をつけた枝が優しく広がる。万葉集にも詠まれ、山吹色という色の名前にもなっているように、古くから親しまれてきた花だ。

株分けにとり合わせた芍薬は一重咲きの「さつき」という国産品種。外国産の大輪種よりも和の雰囲気を感じる品種が山吹には似合っている。



平安神宮献花大会　桑原仙溪　花材／木瓜（白花）　春蘭　花器／掛分釉花瓶・清水保孝作

立華時勢粧を読む　㉓

立花秘傳抄　一

常磐木之部（つづき）

花

花の字、上艸にして下化を用いる。化は造化なり。天地、寒暑、陰陽、草木、皆造化の作す所なり。されば草木四季に花咲き、青黄赤白、八重一重、一草一木の花の内にも二色三色あり。赤き花も白く変じ、紫なるも色を変え、四季咲き、帰り花、皆これ変化の理なり。又曰く、無よりして有を造といい、有よりして無を化という。誠なるかな。冬枯れの草木も春は芽を出し、夏は茂り、秋紅にして葉落ちることわり目前なり。和訓に云う、花は鼻なり。鼻は端なり。草木の端に咲くによりて花と云うなり。

蔓

草のつるを蔓という。木のつるを藤と云う。

松

祝言第一の木なり。

上段中段下段に用いる。

苔晒共に付く。

王安石の字説に曰く、松は百木の長たり、松は公のごとし。故に松は公に従う。古語に云う、木の王は松、花の王は牡丹。

異名　十八公、龍枝、青牛、蒼髯、爰に略す。

和名　千枝草、深見草、十かえり花、百草、都草。

蔵玉集

大内や百敷山の初代草いくとし人のなれてそゆらん

同

春の野や雪けの沢の延喜草花咲きにけり雪におわれて

神山のふもとに植える千世見草うえおきてこそ御調物なれ

松の葉を松毛と云い、松の花を黄松花、また松蕊、松の笠を松毬、三針なるを括子松、五針なるを松子松。

立花に用いる名　男松、女松、若松、緑松、禿松、岡松、五葉の松、引松、茶筌松、枯松（あか松とも云う）、こけ松（葉青くして先赤きを云う）、しらが松（枝松の白きをいう）、かこい松、根じめ松。

若松（わかまつ）

相生いしん、合わせしん、二つしん、直しん又は除心にも用いる。

祝言第一の松なり。

笠松（かさまつ）

直心除心に専ら用いる。みきのくるいようにて花形さまざまに替わりあり。若松に次ぎて目出度き松なり。風を持つ枝とて口伝あり。

緑松（みどりまつ）

直心除心に用いる。下に必ず松をあしらいて、その松よりみどり立ちたる景気かんようなり。又下の古葉すきともぐべからず。古葉なくて緑立つことなし。あるいは請副にも木ぶりにより用いる時は、まず直なる緑を立て置きて、その横へも出すべし。出生直なる道理を瓶にあらわすものなり。

引松（ひきまつ）

出生小木にて漸く下より遣い上せて中までは苦しからず。近代正心、請、副に用いるといえども、巧者の好まざる所にして景気あしきなり。

胴作り、前置に用いるに口伝あり。

松笠（まつかさ）

外の松に松笠を養い用いるに、枯葉枯枝にたより松の葉のいろいろに随いて、景気げにもらしきように持ちうべき。一色物同前。

禿松（かむろまつ）

大きなるは心（しん）にも用いる。中は正心、小（ちいさき）はかこいによろし。水際には用捨（ようしゃ）すべし。この松い

つも替わらざる姿にて、正心よりほか作意なしとて、近代さのみ不用といえど、花形無量なり。工夫を以て立てるに珍しき一手なきにあらず。

かこい松

小松の葉のこみたる、又はみどり松のちいさき、かぶろ松などをわらにてまき、或いはふのりでかため葉をふせ、きれいにして出生すぐなるを竪につかい、横なるをわきへ遣うべし。

かこい松といえば見苦しき所をふせぐ物とばかり思いては、花名人になりがたし。たとえば心の後ろをかこうては松の縁をつづけ、或いは間あきをふさぎては松のうつりを取る。皆これ景にあらずと云う事なし。

根じめ松

小松枝松の葉のよくこみてきれいなるを水際に用いる。古来松、檜の二木は峰よりふもとまで一面に生える物とて、その気色をうつす。又心、請におもき物指す時は、下に必ず松檜などのおもき物にて根をしめざれば花形よくすわらざるなり。

松は祝言第一の物なるに、松斗（？）えんを切りて指しても苦しからずと云えり。縁の切と云うるは不吉の言葉にして、尤も嫌うべきに心得がたき事なり。その道理如何にと尋ねるに、その返答種々あるといえども一つとして道理に叶わず。されば近代名師の中に松ノ縁を切りて指すこと大きに嫌うあり。それ松は百木の長たり。松は公のごとく、公は摂政関白の位にして天子に替わりて国を治める官なり。然るに百木の長たる松、立花の法式をみだして万民の下草おさまるべけんや。

男松、女松、五葉、引松、そのほか品替わりたる松は、一種一種縁を切りて指しわけること古来の法式なり。これを以て同種の松も縁の切りて苦しからずといえるか、名師に会うてこの理を尋ぬべし。

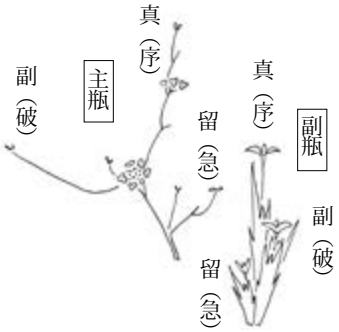
松の前置は三ケの前置のその一つなり。相伝と手練なくては立てるべからず。たとえ見覚え、聞き覚えたりと云えども、似たる事の似ぬ事なるべし。

虫狩（むしかり）　オクロレウカ

仙溪

花型　生花　二瓶飾り
花材　主瓶　虫狩（すいかずら）（忍冬科）
　　別名：大亀の木（おおかめのき）
　　副瓶　オクロレウカ（菖蒲（あやめ）科）

ムシカリと杜若、にしたかったが、オクロレウカを小振りにいけて添えてみた。二瓶を選ぶのが意外と楽しい。



素溪（健一郎）が華道京展に出品した躑躅（つつじ）は、その後家で元気に花を咲かせている。レモンちゃんはその花器の水を飲むのがなぜか好き。

第 67 回 華道京展 「和 テイスト 大人の文化」 4月7日㈭～１２日㈫ 大丸ミュージアム〈京都〉

第 67 回 華道京展「和 テイスト　大人の文化」

4月7日㈭～１２日㈫　大丸ミュージアム〈京都〉

私がいけた藤は、初日にはほとんど色がなかったが、６日間伸びつつ咲きそろってくれた。切らずにおいた花ほどの強さはないが、会場で頑張ってくれたことがとても嬉しかった。撤花したあとも持ち帰って短くいけ直し、さらに数日、甘い香りを楽しんだ。

水揚げ法は口伝。直接私に聞いてください。　仙溪

桑原専慶流いけばなテキスト635号　2016年5月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出逢い花（29）

仙溪

木香薔薇（もっこうばら）（薔薇科）
紫蘭（しらん）（蘭科）

四月中頃から五月初旬にかけて、街中で思いがけず見事なモッコウバラに出くわすことがある。岡山天満屋での花展中にも、天から降りそそぐようなモッコウバラに、とある露地で出逢った。花展会場では庭で咲いた紫蘭をいけている人もあり、この出逢い花をいけた後だったので、確かに同じ頃の花なのだとほっとしている。

いけばなとぶらぶら露地歩きは、こんなふうに繋がっている。花をいける人にはそれぞれにそれぞれの出逢いと繋がりがあるんだと思う。だからいけばなは楽しい。

花器　素焼小壺

陰陽五行

私達人間も自然の一部。前回紹介した陰と陽の性質や働きを繰り返し、また調和を保つことで生きている。素朴な例をあげれば、無意識にしている呼吸も吸って吐いてを繰り返しているし、「むすんでひらいて♪」のようにグーとパーを繰り返すことで血行が良くなる。活発な昼のあと穏やかな夜があるからまた一日頑張れるというように。私達には陰と陽の両方が必要なのだ。（つづく）

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
6月号
No.636

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

大山蓮華（おおやまれんげ）

＜表紙の花＞　櫻子

大山蓮華は山に咲く蓮に似た白い花で、奈良の大峰山系などの自生地では国の天然記念物に指定されている。5～7月の梅雨時期に開花する。深山の林間に野生し簡単には見る事が出来ないので「天女花」とも呼ばれている。枝は分岐し幹は直立しない。

花は横を向いて咲く。同じモクレン科の木蓮や朴の木は大きな花が真上を向いて咲くのに、この花は不思議だ。蜜を出して蝶や蜂をおびき寄せるような事はしないらしい。そのかわり白く可憐な姿と素晴らしい香りだけで、虫も人もとりこになる。

この花は花屋で買い求めたのだが、多分中国原産の園芸種で、ホオノキとオオヤマレンゲの雑種であったウケザキオオヤマレンゲだと思う。ホオノキに似て葉が大きく成長が早いので出荷できるのだろう。それでも一年に一度出逢えるかどうかの花。無垢な美しさを鉄線と合わせてみた。

岐阜花フェスタ記念公園にて
横向きの花を上に向けて撮った

裏白の木

＜2頁の花＞　仙溪

花型　生花　草の花型　副流し

花材　裏白の木（薔薇科）

花器　三つ足青磁水盤

裏白の木は山梨、銀葉などと呼ばれることがある。初夏の葉がひろがってしまう前と、秋の赤い実が花材となる。太い枝は折れやすいので注意する。

花菖蒲と紫陽花

＜3頁の花＞　櫻子

花材　花菖蒲（菖蒲科）

紫陽花（紫陽花科）

花器　カットガラス・コンポート

大きなガラス花器に立てた沢山の白い花菖蒲。大輪ピンクの紫陽花との色と量感のバランスを楽しんだ。美女二人と貴公子達?。

横に生ずるは横に

主材　五月梅（梅花空木）
　　（紫陽花科 以前は雪の下科）
副材　芍薬2種（牡丹科）
花器　陶花瓶

328年前に流祖が書いた「立花秘傳抄五」（立華時勢粧八巻の内の一つ）の中に、「我が心草木にまかせて念慮なく、植に生ずるは植に、横に生ずるは横に遣う時は、草木自然の体顕わなるべし」という言葉がある。これは立花に限らず、生花、投入、盛花にも等しく当てはまる、言わばいけばなの基本中の基本理念である。

上の写真は、横へ長く伸びた五月梅の枝をそのまま生かして、大輪の芍薬2本を添わせたシンプルな投入。五月梅は足元を割り、皮を削っていける。芍薬の葉が自然にひろがるように、いけてから葉をさばく。花がいきいきして見えることがまず大切。これからの季節は切り口を時々切り直すこと。花器の内側のぬめりも拭き取って、新鮮な水でいけ直すと少しでも長く楽しめる。

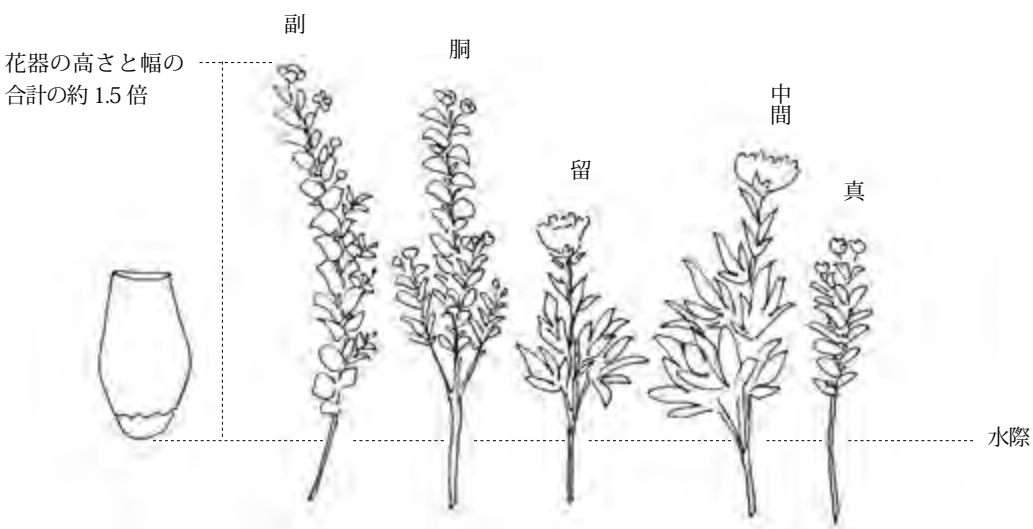
投入垂体副主型

③　中間の位置に２本目の芍薬を挿したところ。芍薬は葉に霧を吹き、別の花瓶などで水揚げをしておいて、さっと挿すようにする。最後に真の位置に五月梅をのぞかせて奥行きをつくる。（４頁の花）

①　五月梅の長く湾曲した枝を副の位置に挿し入れる。五月梅は低木だが、いける前に水切りをすること。さらに足元の皮を削り、切り口を割っておく。

④　右横から見た奥行き。

②　胴の位置に枝分かれした五月梅を加えて水際の景色をつくる。次に留の位置に芍薬を挿す。花瓶に花を挿すときは前へ傾けて出すものからいけると留まりやすい。



それぞれの長さ。主枝の長さは、花器の高さと幅を足した長さの1.5～2倍を目安にして、水の中の深さを加えて切る。

立華時勢粧を読む　㉓

立花秘傳抄　一

常磐木之部（つづき）

松の一色は祝言第一の花にして、又一色のその一つなり。移徒の時かならずこの花を指す。近代初心の人、相伝よくしてみだりにこれを指す大きにおそるべし。たとい少々伝授したりとも、年来の巧者にあらずは松の景気の妙なるところ瓶上にうつしがたし。たとえば筆道をよく相伝したりとも、手習いの錬磨なき時は文字のかたち悪しきがごとし。松の一色は四季ともに立てるといえど、菊漸く終わるより紅梅ややり咲くころまでこそ松の一色は面白けれ。されば神無月時雨にそめぬ松とはいえど、かつは葉もきばみ霜にいたみ雪にうづもれて、替わりたる葉色もいづるは、山もあらわに峰もさびしきころなるべし。いでやこのころの人の春の末より秋の半ばまで変わらぬ色の松一木瓶にあつめて一色となす、何の面白きことかあらん。松は色どり第一にしてむつかしき物なりと古人も云えり。

松に苔晒木を付ける時は、体用よく和合して一木の気色をうつすべし。これ立花の肝要とする所なり。晒木は高山の物なれば、松の気色も年ふり枝たれて、陰たかき心を指すべし。若松みどり松には用捨あるべし。

いでや＝いやはや（不満の気持がこめられている）

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）

松の一色真の花形
第百九図
立花　松一色
桑原治郎兵衛（初版では富春軒）
松　苔

「立花秘傳抄」の花材解説部分は、「木」の字の成り立ちの説明から始まる。これは立花を立てる心得として、草木の目に見える姿だけでなく、自然の生い立ちそのものに思いを致すことの大切さを説いていると思う。そして先ずは「松」。全118図のうちの85図に松が使われていることからも、いかに松が大事なものかがわかる。

ここに松一色立花、砂の物の図を載せておくが、木版刷りに手彩色で様々な色が松葉に塗り分けられている。ただ同じ緑の松だけで立てたのでは何も面白くないのだよと、文中にも書かれている。立花の奥深さを感じるところである。

松の一色行の花形

第百十図

立花　松一色

冨春軒

松　苔　松毬

松の一色砂の物

第百十一図

二株砂物　松一色

（初版では冨春軒）

松　晒　苔　松毬

山帰来の根

仙溪

流展（岡山）出品作

花材　山帰来（猿捕茨）の根
　　アンスリウム　ミリオクラダス

花器　銀織部花器（柳原睦夫作）

この骨のようなものは猿捕茨の根を晒したもので、このように地中にあって普段目にすることのないものも、いけばなではいけることがある。地中にあっても植物の造形の一部。美しく使って他には無い雰囲気を出せるかどうか。宇宙的な花器で星雲のように。

ネオレゲリア・ファイアーボール（レッドパウワウ）

櫻子

流展（岡山）出品作

花材　ネオレゲリア・ファイアーボール
　　アマリリス　オンシジウム
　　ミリオクラダス

花器　条文扁壺（竹内真三郎作）

このネオレゲリア・ファイアーボールは鉢植から出た一本の茎のままをいけている。花器から出した支柱に根ごとフェルトでくるんで留めた。水やりは葉の中心に霧を吹く。

岡山県本部主催
桑原専慶流いけばな展
テーマ：ＥＮＮ

共催：倉敷市文化連盟
後援：岡山県文化連盟、岡山市、倉敷市、倉敷市教育委員会、山陽新聞社、桑原専慶流家元
会期　4月20日(水)～25日(月)
会場　岡山天満屋
出品　前・後期　合計180名

今回の会場構成は役員の先生方による発案で、気持ちよく鑑賞できると大変好評だった。会場中央に吊られたスクリーンの間から、その奥の花席や人が見える風通しの良いレイアウト。苑、縁、艶、様々なＥＮＮをテーマにした大作の見応えある花席と、中作、小作、掛け花がバランスよく配置され、静かな生花コーナーも気品があり、桑原専慶流の多様ないけばなを楽しんでいただけたことと思う。

会場入口前の「みどりの広場」にて花手前、呈茶、雅楽演奏、箏曲コンサートがあり、多彩な内容の花展であった。

また、入口に熊本地震義援金箱を設置。来場者・出品者に協力をお願いし、集まったお金を赤十字を通して寄付させていただいた。

会期中に鳳雅会による雅楽演奏と三鈴会の皆さんによる箏曲コンサートを楽しんでいただいた。演者の方々にもいけばなをゆっくりご覧いただけたので、今後このご縁がひろがっていきますように。

桑原専慶流いけばなテキスト636号　2016年6月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

ネオレゲリア

櫻子

花材　ネオレゲリア・アネックス
（パイナップル科）
胡蝶蘭（蘭科）
花器　ガラス花器

胡蝶蘭と取り合わせているのはネオレゲリア。熱帯から亜熱帯アメリカに分布するパイナップル科の着生植物。薄いピンク色に色づいているので花のようだが、硬い葉がこの様な形を作っている。花は株中心の筒部分に咲くが、あまり目立たないので葉が花の代わりをしているようだ。

4月の岡山での流展でもネオレゲリア・レッドパウワウとアマリリスの投げ入れをいけさせていただいた。このネオレゲリアの花は赤紫色の子株を沢山付けた形で面白く、変化がつけやすかった。エアープランツに近いので、水に浸けなくても良いが、中心部の筒に水を溜めるように与える。もともと真上を向いている植物なので、前に向けていける事は溜め込んだ水がこぼれてしまうから、迷惑な事だろうなと思いながら霧吹きで朝晩水をやり続けた。

花会の間は寝ても覚めても花のご機嫌を伺いその変化を眺める事ばかりだ。

胡蝶蘭も流展が終わってから松村先生から頂戴した。岡山産の切りたての花だったので、京都に持って帰らせていただいた。60℃程のお湯の中で水切りしてもと通りに。一ヶ月以上もの間美しく元気で嬉しかった。

岡山流展の思い出に何度も浸りながらこの花を見つめている。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
7月号
No.637

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

ファーン（シダ類）

＜表紙の花＞　櫻子

花材　ディサ3種（蘭科）
　　アンブレラ・ファーン
　　（羊歯（しだ）科）
　　擬宝珠（百合科）
花器　ガラス鉢

オーストラリアにはユーカリ、プロテアやピンクッション、リュカデンドロン、カンガルーポーのようなオーストラリア固有の花であるワイルドフラワーがあり、普段のお稽古にもよくいけさせてもらっている。又最近ではユニークなグリーンの種類も増えてきた。

ファーンと呼ばれるシダ類は原生林の高木の下に一面に広がるように自生している。

今回初めて使ったアンブレラファーンは輪生の広がりを持つシダで、日本の山野草にもよく似合う。そして大変強いので二ヶ月以上も取り合わせを替えて飾って楽しんだ。

南アフリカに自生するディサという名前の蘭の花。これも海外から輸入されたもの。日本での栽培はとても難しいらしい。斑入り擬宝珠を加えて三種でいけたが、それぞれが違和感無く馴染んでいる。

山の風情

＜2頁の花＞　仙溪

花材　猿捕茨（百合科）
百合「セラダ」（百合科）
山紫陽花（紫陽花科）
下野（薔薇科）

花器　陶花瓶

この黄色の百合はセラダという名だが、一輪咲きに仕立てられて野の風情が感じられたので、山野草をとり合わせて投入にした。猿捕茨には棘があるが、この枝には無かった。南の方の浜猿捕茨は棘が無いので、掛け合わせてあるのかもしれない。品種改良された花材といっても、これらのような山の風情を感じる物が手に入るのは嬉しい。

パイナップル

＜3頁の花＞　櫻子

花材　パイナップル
（パイナップル科）
オクロレウカ（菖蒲科）
薔薇（薔薇科）

花器　赤色ガラス鉢

形は松笠に、味はリンゴに似ているところからパインとアップルでパイナップルだそうだ。美容と健康に良い栄養素が多く含まれて、夏バテにも効果的。そんなパイナップルに感謝をこめて同系色の薔薇と盛花にした。オクロレウカをエネルギッシュに広げて。

夏櫨　姫百合

仙溪

花型　生花　二瓶飾り
主瓶
花材　夏櫨（躑躅科）
花器　白竹竹筒
副瓶
花材　姫百合（百合科）
花器　青白磁水盤

夏櫨の名前の由来は、夏の内から櫨のように葉が色づくところから来ている。

さて、この櫨とはどんな木だろう。ハゼノキは漆科の落葉樹で、その果実が木蝋の原料にされる。安土桃山時代末の１５９１年に中国南部から種子が輸入されたのが最初で、江戸時代の蝋燭の普及に一躍買ってきた。九州の島原藩ではハゼノキ栽培に力を入れて木蝋が特産品となり、現在も製造されている。

ハゼノキが日本に入る前から、日本に自生する漆科の多くをハゼと呼んでいたようだ。蝋を採ったり、樹皮が染料にされたり、弓の材料となったり、もちろん漆を採ったり。そして秋にはほとんどが見事に紅葉する。万葉集にも一首、梔弓の名前で詠まれている。

夏櫨のことを書くつもりが脇道へそれてしまったけれど、花の名前を調べる内にいろんなところへ辿り着くのも、いけばなの楽しみの一つである。是非皆さんも。

立華時勢粧を読む　㉔

立花秘傳抄　一

常磐木之部（つづき）

檜

祝言に用いる。苔晒共に付く。上にばかり、中にばかり、下ばかりも使う。これより奥上中下と有るは請、副、見越、流枝、控に立てるなり。前置には大木の類は用いず。

訓蒙図彙に檜を図してこれ栢と名づく。本草綱目に云う、栢は側栢なり。数種有ると云々。順和名集の側栢日本の白檀と云々。未だ詳らかにあらず。

和名　さひ　富草　幸草

天智天皇花尽異名

大内や名もむらさきのみつま草家作りえのかけそ久しき

蔵玉集

此時は四方も八角もおさまりて四ツま草にも花は咲けり

古今

この殿はむへも富けりさき草のみつは四ツはに殿作りして

地はえ檜と云うは実植にして漸く五尺にたらず。出生直なるゆえ、正心に用いるはこの檜なり。

板檜これも小木にして葉のうらおもてなくひらめにかさなりありて、葉先丸く白檀の葉のごとくなり。自然に立ちたる木末あらば正心にも用うべき。かこい、つや、ねじめなどに当代専ら之を用いる。

しよろ檜と云うは、若木の小枝なるゆえ、横へは遣えども正心に用いず。これ立花第一の賞木にて、副、見越、つや、あしらいに指して叶わざるようにいまも古風にはこれを用いる。当代は初心の物にしてさのみ好まず。さりながら上手の檜つかいは下手の美花にはまさるべし。よくよく心を付て新たに指すべきなり。

檜しんは大木の枝を切りて葉つきよく、木つき面白を用いるなり。小木にはまれなる物なり。まずしんにはたらきある時はその勢いを流枝、或いは請にもたせ、板檜、しよろ檜なんどの小枝をもって水際へあしらいくだし、一所一所にはたらきを付け、又一瓶の内の檜をつかねて一木となして見る時、たがいに和合して景気面白ように指すべきなり。檜は花も咲かず葉も見事ならずといえど、立花の上にては第一の景物とす。初心巧者のわかちは檜にてよくあらわるる物なり。

柏（かしわ）

祝言に用いる。

上段中段苔付けず。

晒木は成る程ほそきを用いる。

心、請、副、控枝。

流枝にならず。

葉は水際までさげず。

本草綱目に云う、槲（かい）　唐韻云柏　藻塩草、ならの広葉　葉広柏　青柏

秋柏

わくら葉祝言に嫌う。

病葉とかきて、赤きはの虫のきしりて朽ちたるを云う。

柏は大木なりといえど、これ古法なり。然るに近代あまねく太きを用いるは出生を知らざる故なり。ある師の云う、柏の晒木は細き枝のところどころ皮の残りたるこそ、同木の景気もうつりて面白き物なりと云えり。

広葉の類一瓶に一色ならでは指さず。柏、枇杷、紫苑、ぎぼうし、だんとく、うこん草、朴の葉、のような類なり。

柏の大葉水打つ時は、葉しだれて花のぐあいちがう物なり。茎を枝に結びつけて遣うべし。またよく水をあげさせんとならば、枝の皮目を一方削って水へ入るべし。

テキスト615号で掲載した立花図の一つに檜を真に使った立花があったので、再び紹介しておく。

第八十三図
立花　檜除真
左草の対の花　寺田八郎兵衛
檜　苔　梅擬　松　菊　小菊
熊笹　柘植　嫩　檜扇

師範会研修会

「立花講座」

会期　6月12日(日)

会場　京都ブライトンホテル

講師　桑原仙溪

季節の花材で立花を一から立てるところを見てもらい、「役枝の名称」「槖駝(たくだ)さんの教え」「立花十徳」について解説した。

除心立花

花材

夏櫨　笹百合　珍至梅　躑躅

姫百合　岡虎の尾　紫先代萩

穂咲下野　釣鐘鉄線　羊歯

花器　青瓷花瓶（木村展之作）

この立花は「いけばなプレゼンテーション」に出品したものを元に一部花をかえて立てたもので、丁度、笹百合の時季だったので、山で笹百合に出逢った時の感動をもとに、山の草木を集めて立てている。水色の器に白、薄桃色、桃色、紫色、黄色の花が優しく乗った。

同志社大学通信

One purpose 187

～同志社人訪問～

桑原仙溪さんに聞く

現役大学生のインタビューに答えて、私のいけばな観を記事にしていただいた。

「花と無心に向かい合うことの素晴らしさを、一人でも多くの人に伝え、日本が培ってきた自然を慈しむ心をよみがえらせ高めていく。それがいけばなの家元の務めだ。」

※この冊子をご希望の方は家元事務局にお尋ねください。

沢蓋木の立花

仙溪

日本いけばな芸術展出品（5月）

花型　除真立花　下段除

花材　沢蓋木（灰の木科）
　　躑躅（躑躅科）
　　杜若（菖蒲科）
　　武蔵鐙（里芋科）

花器　龍耳銅花瓶

沢蓋木は名前のごとく渓流を覆うように枝を伸ばす木だ。初夏に白い花を咲かせる。花フジさんの山の畑にも小川の土手に植えられていて、晩夏に訪れた時には瑠璃色の実が沢山ついていた。

日本、朝鮮半島、中国に分布する落葉低木で、灰の木科、灰の木属の植物。灰の木の名前は、木を燃やした灰が染料の媒染剤とされたことから来ている。木にアルミニウムが多く含まれていることが、染料の色の発色や定着に役立つそうだ。現在のみょうばんに代わるものだった。昔はこういう灰を専門に作る人がいて、植物のことをよく知っていた。現在でも陶芸家の中には様々な木の灰で釉薬を研究されている人もおられる。植物は灰になっても人の役に立っているのだ。ただし環境が汚染されたところで育った樹木は、灰の利用もできなくなるが。

さて、苔むした沢蓋木の枯木を、その曲がりや枝付きを生かしながら立てたのだが、真の出口が低い花型になった。山中の沢に杜若が咲き、躑躅が彩りを添えている。テンナンショウの仲間の武蔵鐙をのぞかせると、深山の景色ができあがった。

第 49 回 日本いけばな芸術展　テーマ「みらい、かける。」　5 月 11 日(水)～ 16 日(月)　大阪高島屋 7 階

④

⑥

⑤

桑原専慶流いけばなテキスト637号　2016年7月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出逢い花（30）

仙溪

満天星（ドウダンツツジ）（躑躅科）
木槿（ムクゲ）（葵科）

花器　陶製鉢カバー（ベルギー）

湯呑みのように見えるけれど実は鉢カバー。植木鉢を部屋の中に飾りたいとき、プラスチックの容器のままでは味気ない。そんな時のカバーとして大小いろいろな形で売られていた。ベルギー製で、黒陶に鮮やかな色の釉薬がかけられ、貫入（カンニュウ）がアクセントになっている。

ミニ鉢植用の器を二つ購入した時から、水が入れられるなら、対で花をいけようと決めていた。どんな花を出逢わせようか、そんな気持にさせてもらえるのは、きっと器の力だと思う。食卓や窓辺に飾るような気楽な花が似合う器。一輪の花でもお洒落に飾れる、そんな器に最近は目が行ってしまう。

ドウダンツツジは大きな枝から小さな小さな小枝まで、器の大きさに合わせてどんな大きさにもいけられる重宝な枝だ。小さくいけると風車（カザグルマ）のような葉の姿がよくわかる。グレーの釉薬の方に翠（ミドリ）をいけて、赤い方には底紅（ソコベニ）のムクゲを一本、器の口に乗るようにいけた。緑色の背景に置くと、白と赤が爽やかに薫る。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
8月号
No.638

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

エレムルス

＜表紙の花＞　櫻子

花材　エレムルス（百合科）
　　トルコ桔梗（竜胆科）
　　モンステラ（里芋科）
花器　陶花器（市川博一作）

エレムルスはイラン、アフガニスタン、ヒマラヤ等に分布する宿根草。英名はデザートキャンドル（砂漠の蝋燭）またはフォックステイルリリー（狐の尻尾百合）。1本に300から500の花をつけ、高さ2mになるものもある。

花色は黄色を中心に、オレンジ、白、サーモンピンクなど。5月から7月頃に出荷される。

以前、飼い猫のレモンちゃんが野良猫と喧嘩したとき、相手を威嚇するためか尻尾がいつもの何倍にも膨れていたのを思い出す。表紙の満開のエレムルスはまさにその時の尻尾みたい。きっとエレムルスも乾燥地の厳しい環境に負けないぞ！と咲いてきたのではないかしら。

横から見た奥行き

クルクマ３色

＜２頁の花＞　櫻子

花材　クルクマ３種（生姜科）
　　向日葵（菊科）
　　ミリオクラダス（百合科）

花器　練込陶花器

クルクマの小輪種は優しいイメージ。夏には爽やかな白花を主に。

横から見た奥行き

ヒマラヤの百合

＜３頁の花＞　櫻子

花材　百合「クシマヤ」（百合科）
　　京鹿の子（薔薇科）
　　羽団扇楓（楓科）

花器　陶花瓶（鈴木爽司作）

ヒマラヤの百合「ネパレンセ」の改良種「クシマヤ」。淡緑色に臙脂色が入る。神秘的で美しい百合だ。

横から見た奥行き

棕櫚竹（しゅろちく）

仙溪

花材　棕櫚竹（椰子（やし）科）
　　アンスリウム（里芋科）
花器　陶花器（竹内眞三郎作）

庭の棕櫚竹をときどき間引いている。出逢い花でも一度、庭から切った葉を使ったことがあったが、今回は枝ごといけてみることにした。傷んだ葉は切り、勢いのある葉を残す。作例では3本の棕櫚竹を使っているが、厚みも広がりも充分にあり、なかなかの存在感がある。

棕櫚竹はヤシ科・カンノンチク属の常緑低木で、中国南部原産。日本には琉球を経て渡来し、三百年ほど前から栽培されてきた。葉は棕櫚（しゅろ）に似て、幹は竹に似る。ただし竹のように中空ではなく、とても硬い。

この棕櫚竹の広がりには、大輪の赤いアンスリウムがよく似合う。赤黒い品種も混ぜると、色に深みが加わった。

別の器でビルのエントランスにいけたのを、左横から見たところ。

立華時勢粧を読む　㉕

立花秘傳抄　一

常磐木之部（つづき）

枇杷

祝言上中。

苔晒用いず。

心、副、見越、請、控枝。

若木の直なるに葉の付けるは正心にも用うべし。

流枝にならず。

本草綱目に云う、その葉の形琵琶に似たり、故に名付く。

草木によらず陰陽を指しわくるといえど、大葉にかぎりて陰陽を第一とす。易曰く、万物生成、陰を負い陽を抱く、されば草木の発出る時は表を内にして裏を外にす、これなり。葉ひらけて後、表はやわらかにして天にむかい、裏はこわごわしくして地にむかう。されば葉の表は陽、葉の裏は陰なり。

枇杷、柏をもぎ葉として三枚にても五枚にても遣う時、一枚にても二枚にてもかならず裏を見すべし。或いは葉先そりかえり、又は横ざまより裏すこしなりとも見ゆる時は、陰陽備わるとて是をゆるすなり。

三枚五枚遣うとも、ちいさき葉は中に遣い、大きなる葉にて外よりいだかせて立つべし。これ出生の当然の理なるもの歟。もし大小内外乱れる時は、かならず見にくき物なり。大葉四枚六枚遣うこと嫌うといえど苦しからず。口伝。

陰ばかり陽ばかりに遣いて苦しからず。口伝。

おもとに立合て苦しからず。口伝。

花形によりて大葉水ぎわに遣うて苦しからぬ事あり。

枇杷、柏をもぎ葉にて遣う事むつかしき物なり。しまりたる時は働かず、ゆるやかなる時はくだけやすし。ある師曰く、除いてのかざれ傍てそわざれ。この語を覚えて指すべしと云えり。

広葉は五、七、九枚遣うとも残らずよく見えるように指すべし。一枚の内半分なりともかくれる事を嫌う。師云う、広葉は名を指すべしと。

前枇杷、前柏とて胴作りに立てる時は、まず一枚葉先すぐなるを裏を見せて立て置く。それよりうつりを請けて三枚、五、七枚、あるいは

歟＝疑問・反語・詠嘆（〜だなあ）で使う。ここでは詠嘆として使われている。

九枚ことごとく働きありて、陰陽よろしく、又つかねて一木に見る時、景気面白様に立つなり。

古来より大葉遣いは枝を付けずにして葉ばかりつかい来る。これをもぎ葉立てと云って、今様さのみ好まず。旨趣(ししゅ)いかにとなれば、枝ある物を葉ばかりに遣う時は、出生の景気うつらずしてしかも働きなし。五枚三枚遣うとも一枚はかならず枝を付けて遣うべし。

前枇杷とも胴枇杷とも云い、これをもぎ葉遣いとも名付く。

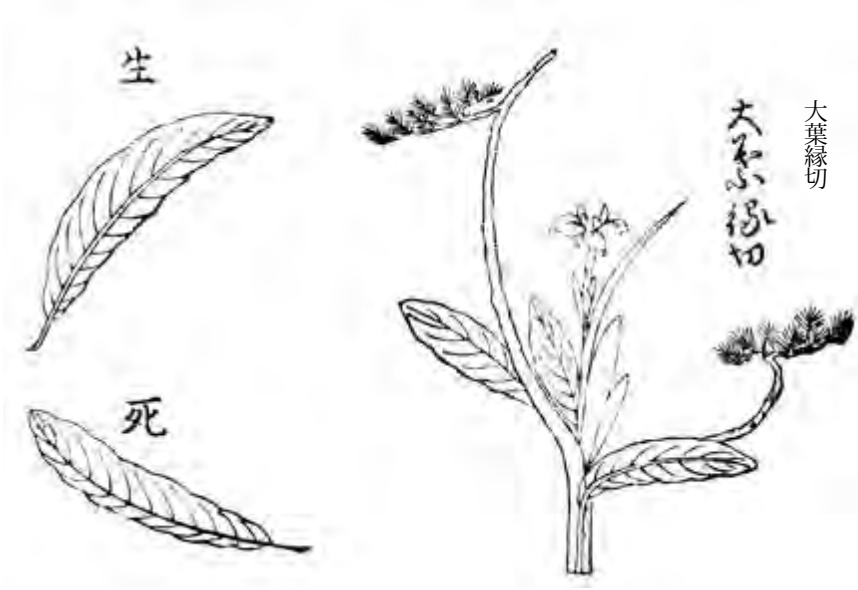
柏は葉と葉との間縁遠くても苦しからず。枇杷は縁近く指すべし。これはもぎ葉立ての時の事なり。

大葉遣い初心の時は、縁のきれる事まま多し。或いは正心の後ろより流枝の上を前へとおして

前柏、柏の胴とも云い、これを枝葉遣いと云う。

請にて縁をきり、或いは副の下を前へくぐらせては、控枝にて道をきる、前後友に同断なり。

大葉は中のしべを見て遣うべし。下へなびき



たるは生葉なり。さかさまに遣うは死葉なり。

枇杷、柏、心に立てる時は、一本は立てず。請、副、控枝などへ指し下げるべし。又はもぎ葉にて下をあしらうべし。或いは副の付きにくき心には、大葉一枚にて副をもたする事あり。流枝の方おもき時は大葉一枚にて請をあしらう事あり。別て大葉遣いには伝授あまたある事なり。

前号から柏と枇杷の解説が続いたが、これら広葉の類は一瓶に一種類のみを使うのが望ましいと書かれている。

特に枇杷は立花図の多くに使われている。どの絵図でも役枝とのバランスが見事である。今は正真の受筒を隠すために使うことが多いが、枇杷の葉によって立花に躍動感を加えられることを見直したい。

ここに枇杷を使った立花図を二つ再掲載しておく。

第八十一図
左行の対の花　中川常意
松　山吹　躑躅　杜若　椿　伊吹
小羊歯　小菊　要　檜扇　柘植

第十七図
立花　松除真
除心の内行の花形　中流枝立　寺田八郎兵衛
松　晒　百合　枇杷　柘植　紫陽花
要　小菊　檜扇

花あるからこその心広めたい

京都いけばな協会新会長 桑原仙溪さんに聞く

京都を拠点に活動するいけばな33流派でつくる京都いけばな協会の新会長に、華道桑原専慶流家元の桑原仙溪さん（55）が就任した。副会長として会の運営に携わって6年。新たな責務を担う桑原さんに、いけばな文化への思いや花を生ける心について聞いた。（太田敦子）

「いけばなを通して日々の暮らしや社会生活に役立つメッセージを発信できれば」と話す京都いけばな協会の桑原仙溪会長（京都市中京区・冨春軒）＝撮影・坂本佳文

「文化として学校教育の中に」

―いけばなの魅力をどうやって伝えていくか。

いけばなには芸術的な側面ももちろんあるが、私は東日本大震災後に東北を訪れた際、花があったからこそ見知らぬ人たちと心を通わせることができた。いけばなを習うことで新しい交流が生まれ、心を込めた作品が家庭や会社で生かされる―そんな存在意義を問い直したい。若い人が「何かやりたい」とアンテナを張った時に「いけばなってやっぱりいいよね」と思ってもらえるような企画ができれば。

いけばなは決して特別な存在ではなく、日々の暮らしを豊かにする一つのツールとして捉える人が増えることに期待している。

―今、流祖が残した書物を読み返している。

江戸時代初期に流祖が書き残したものを読んでいるが、現代に通じる考え方がたくさんあることに驚く。例えば「木に接する時には自然に従い、生まれ持った働きを導くだけ」といった記述があるのですが、非常に奥が深い。力ずくでねじ伏せようとするのではなく、植物を敬いつつ植物のことを知ってよさを生かす。この考え方はいけばなにとどまらず社会生活のさまざまな場面に置き換えられる。会長として、いけばなを通したこういう考え方を広く伝えてゆきたい。

―文化庁移転などの追い風もあるが、この動きをどう活用するか。

文化を暮らしの中に息づくものとして定着させてゆく好機だと思っている。その一つの方法として、学校教育の中に授業としていけばなを入れたいと協会を挙げて願っている。勉強というよりも、子どもたちが「文化って楽しいな、興味深いな」と思ってくれる機会になれば。習ったいけばなを家で生けて家族に褒められ、「ありがとう」と言ってもらえる。そんな経験を積むことができれば、暮らしにいけばな文化が貢献できるのかなと思う。

（京都新聞7月17日(日)朝刊）

美白（びはく）という名の百合

仙溪

花材　丸葉の木（満作科）
　　鉄砲百合「美白」（百合科）
　　女郎花（おみなえし）（女郎花科）
　　スプレー菊（菊科）
花器　布目陶花瓶（伊藤典哲作）

鉄砲百合は咲くと白い百合だと感じられるが、花屋に売られているのは蕾の状態なので、いけてしばらくの間は淡緑色がだんだん白に近づくのを眺めることになる。

蕾のうちから白さを楽しみたい。おそらくそんな思いから、この「美白」という名の鉄砲百合が生まれたのだろう。確かに蕾のうちから、はっとする美しさを感じる。緑の中でも不思議な存在感がある。ただ、咲いた時の自然な感動は半減するようにも感じた。

切り花の多くは過去の品種改良のお蔭で、より美しく、強く、大きくなってきた。近年は葉も大切にされ、また風情を残す改良も多く見受けられる。今後、どんな花たちに出逢えるだろう。

横から見た奥行き

株分け生花

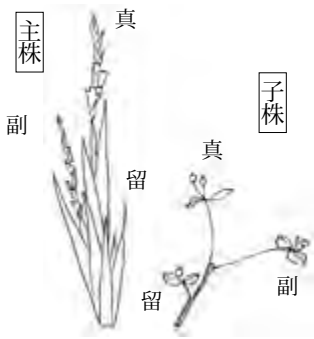
仙溪

花型　株分け
花材
　主株　グラジオラス（菖蒲科）
　子株　ヒペリカム（弟切草科）
花器　足付小判型陶水盤
（伊藤典哲作）

夏の生花には7月の檜扇、8月の朝鮮槙のほかにも、水辺を連想する植物として、太藺や蒲、姫蒲なども よくいけている。それらに加えて比較的暑さに強い洋花もいけることがある。作例のグラジオラスもその一つだ。

グラジオラスの生花は意外に難しい。作例では葉を外して組み直しているが、葉を外さない方がいい時もあり、その判断には経験から得た勘が必要になる。

ヒペリカムの名前で売られる艶やかな赤い実は、和名を小坊主弟切という。白いグラジオラスに赤い実がよく合っている。



夏の立花

仙溪

花型　除真立て

花材

夏櫨　梅花躑躅　檜扇　桔梗

笹百合　下野（紅白）　羊歯（しだ）

花器　粉青瓷壺（木村展之作）

この真の夏櫨は7月号8頁の立花と同じ枝だ。約一ヶ月持ったことになる。かなりの太枝だったことと、足元を長く削って込藁に挿したので、よく水を吸い上げたのかもしれない。檜扇が季節を感じさせてくれる。

横から見た奥行き

桑原専慶流いけばなテキスト638号　2016年8月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出逢い花（31）

仙溪

アナベル（紫陽花科）
鉄線（金鳳花科）
花器　ベネチアンレースグラス花器

アナベルは北アメリカ東部原産のアメリカノリノキの園芸品種で、紫陽花の仲間である。開花時は白色で、やがて緑色に変化して枝に残る。作例のアナベルも開花後に緑色になったところという感じ。このアナベルに紫色の鉄線を出逢わせたが、それだけでは地味なので、器で爽やかな華やぎを加えようとして選んだのが、このレースグラスの花瓶だ。

少し乾燥してふわりとした感じのアナベルに、レース越しに見える水と、鉄線の花の潤いが瑞々しい。

祇園祭後祭巡行　7月24日(日)

今年は健一郎、順之助、私の三人で参加した。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
9月号
No.639

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

月桃（げっとう）

＜2頁の花＞　櫻子

花材　月桃（生姜（しょうが）科）
　　薔薇（ばら）2種（薔薇科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花器　赤色釉花器

ゲットウの実を見てキャンディを想像する人は多いと思う。とても不思議な形をしている。去年の6月初旬、屋久島でゲットウの花に出逢った。白い蕾の先がほんのり赤くて、中国絵画に出てくる桃が頭に浮かんできた。

月桃という名前も不思議な名前だ。なぜ月なのだろう。

沖縄ではゲットウの葉で餅を包んで蒸したムーチーという菓子がある。葉の良い香りがするそうだ。いつか食べてみたい。

右・フイリゲットウの蕾。
左・ゲットウの花（屋久島にて）

真主型の花

＜3頁の花＞　櫻子

花材　唐胡麻（燈台草科）
　　鳥兜（胡麻の葉草科）
　　岡虎の尾（桜草科）

花器　青色釉花器

トウゴマ、ニューサイラン、トクサは真主型の花として小さい頃からよくお稽古した花で馴染み深い。子どもでも切りやすく挿しやすいからだろう。

トウゴマは長く直立した形にいけられることが多い。赤い茎や実が目立つようにかもしれないが、短く前に倒す形も軽やかで、葉を支える赤い茎が細くても力強いのがよくわかる。ヤツデに似た形の葉の葉脈も赤くて淡緑色を引き立てている。

うしろに高く立てるのではなく、前へ倒す花型。真主型では気がつかなかった姿を見つけた。

彩りを考え、トリカブト、オカトラノオと取り合わせた。

横から見た奥行き

（表紙の解説は4頁）

老爺柿（ろうやがき）

＜4頁の花＞　仙溪

花材　老爺柿（柿の木科）
　　白菊大輪（菊科）
花器　黒釉陶花瓶

ロウヤガキは渋柿で食用には向いていない。原産地は中国。実の形からツクバネガキとも呼ばれる。

岡山の先生の庭には、見上げる高さにロウヤガキが育っているそうだ。いけばなでは以前からマメガキ（豆柿）が使われることがあったが、近年このロウヤガキも見かけることが多くなってきた。

ロウヤガキは園芸学者の菊池秋雄が中国から持ち帰ったそうだ。京都植物園とも縁のある菊池先生は青森の出身で、父上は「青森りんごの始祖」と呼ばれる菊池楯衛。

菊池楯衛は津軽藩の武家に生まれたが、花や木が大好きで、明治となって以降、北海道でアメリカ人の農業技師から果樹栽培の技術を学び、青森がリンゴ栽培に適していると確信してからはリンゴ栽培一直線にすすんだ。それが今の「青森といえばリンゴ」に繋がっている。

ロウヤガキを調べていて横道に逸（そ）れたが、植物が大好きで、良い木を育てることに情熱をそそいだ人のお蔭で、現在美味しいリンゴを食べることができることに、今更ながら感動している。

囁（ささや）くような・・・

＜表紙の花＞　櫻子

花材　竹似草（芥子（けし）科）
　　女郎花（おみなえし）（女郎花科）
　　大手蓼（おおたたで）（蓼科）
花器　白黒陶花瓶

山の林道脇などの日当たりの良い場所に背高く白っぽい姿で群生するタケニグサ。

初秋の秋草ととり合わせると、力強い姿で目立つ存在だ。

葉の形も複雑で、裏側が白く、とても柔らかい。ケシ科の毒草なので、鹿にも食べられず伸びやかに育ったようだ。

作例は実の出来た状態でいけているが、カシャカシャと静かな音が感じられる。ささやきぐさ「囁草」と呼ばれる所以（ゆえん）。

茎が竹のように中空なので「竹似草」。竹と一緒に煮ると竹が柔らかくなり細工しやすくなるので「竹煮草」ともいわれるらしいのですが、本当でしょうか？

横から見た奥行き

レモンちゃんだより

石臼(いしうす)の水溜(みずため)はお気に入りの給水所。パトロールの途中で、大切な水分を補給しています。

立華時勢粧を読む　㉖

立花秘傳抄　一

常磐木之部（つづき）

栢樹

祝言上中下。

苔、晒木付。

心、副、請、正心、胴、控枝。

（前置に用いず。）

穏栢、圓栢。

禅家に謂、庭前の栢樹子とはこれなるべし。

胴に用いる時、一本は立てず。しかれども景気二本に見える栢樹ならば苦しからず。

胴いぶき

胴栢樹とて古来より専ら用い来たるといえども、初学の物にして巧者の好まざるものなり。しかれども花形により珍しき作意も指し出すべし。

玉いぶき

これを玉栢樹という。胴作りに専ら用い、その形種々替わりありて面白き物なり。好んでつかうべし。

しょろいぶき

栢樹＝柏樹、柏槙、伊吹のこと。

しょろいぶきと名付く、横に出すには細く軽くして、しかも木末きおいてよろしきなり。副、請、正真、つやあしらいなどに専ら用うべし。

栢樹は高山の物なるゆえ、晒木を用いるに、よく晒て白く、するどなるを用いれば、体用和合して景気殊更に面白く、図に多くしるすなり。よくよく工夫有るべし。

栂

非祝言　上中下

栂はよく苔の付く物なりといえど、古来より苔木をやといて付ける事なし。さりながら心にても請にても自然と苔の付きたる木ならば、又外の苔木をやといあしらいても苦しからず。

栂のかれほ流枝、控枝などに面白い物なり。体の付よう専一なり。つかいよう檜と同前なり。

非祝言古歌

いささらは茂りあいたる栂の木のとかとかしきを立て過さん

榊（さかき）

祝言　中段

古来より祈祷の花、神前の立花に必ず用いる。

祝言の歌

神代より色もかわらぬ榊葉はさかへときはにむかふなりけり

かなめ

祝言　中段

正心に用いるに心得あり。榊、かなめ、わくら、しらかしは大木ありといえど、皆若芽

第五十一図
立花　伊吹除真　大橋源七
伊吹　苔木　芍薬　要　柘植
杜若　樫木　小菊　著莪

第五十四図
立花　伊吹除真　澤重左衛門
伊吹　柏　桔梗　仙翁花　柘植
木槿　夏はぜ　檜扇

を用いるゆえ、請、副に用いず。他これになぞらえて知るべし。

わくら

非祝言

中段に用いる。正心にも立てる。この外右に同じ。

しらかし

祝言

中下に用いる。同作り、前置によろし。

かすおしみ

非祝言。仮名を嫌うか。中下。大木ありといえども若木を用いるゆえ、たかく指さず。梅のずわい、さし合いなり。

黄楊

祝言。控枝。流枝にも用いる。水ぎわより遣い上れば、胴までも上る。前置に専ら用いる。つげにほそき苔を用いる。つつじの枝の苔をかり用いるなり。

和名、豆計。

本草に曰く、黄楊その性、長じ難し、年毎に長ずること一寸。又閏歳は長ぜざるのみ。

東坡の詩に云う。園中草木春無数、只黄楊の閏年に厄するあり。

つげ種々あり。伊勢、浅間につげあり。針なく葉の表に艶ありて、裏に筋あり。秋より紅葉して、四季凋まず、これを女つげという。本草綱目の柘は又外にあるべし。（末勘）

黄楊一本は立てず。景気二本に見える時は苦しからず。

近代はつげの葉先を美しくはさみ、様々の形に作りて指す人多し。いったんはきれいなるようなれども、よく見るに至りては、出生の景気にそむき、またはたくみに執著したる作者の心もあらわれ、後は興ざめて見にくき物なり。ただ自ずからなるきれいを好みて、きれいをたくむ事なかれと古人も云えり。これは上手になりての一重の上の教えなり。

黄楊は立花第一の景物にして、初心巧者のわかちなく指し得がたき物なり。まずその形、円方、長平、木裏、木表、左右、高下、それぞれの出生にしたがいて、よく取り合い、木すえ立ちたるは高くのぼせ、横にひらめな類は下に遣い、軽きは上に、重きは下に立て、縁遠きは下草をもってあしらいかけ、近きは色をきりて遠く見せ、景気あり、はづみ有り、浮かず沈まざるようにと、心がけ肝要なり。

執著＝執着に同じ。　黄楊＝柘植。

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）
※立花図転載
『花道古書集成　立華時勢粧』（思文閣出版刊）

縞薄（しますすき）

仙溪

花材　縞薄（しますすき）（稲科）
　　鶏頭（けいとう）2色（苋（ひゆ）科）
　　吾亦紅（われもこう）（薔薇科）

花器　黒赤ガラス花器

ススキは水揚げが難しく、すぐにカリカリに乾燥してしまうが、その中でも比較的よく水を揚げるものにシマススキがある。

白い縞模様が写真にはっきり写るように前方へ数本集めてみた。前方へ張り出す胴主型の花型だが、作例では写真に納めることを考えて、葉が広がりすぎないように苦労した。広い空間にいける時にはおすすめである。

とり合わせたケイトウは頭が大きく、葉が見事なまでに茂っていた。8月初旬にいけたのでまだススキの穂が出ていないのが残念だが、ワレモコウを加えると、秋が感じられる。

横から見た奥行き

七竈の立花

仙溪

花材　七竈（薔薇科）
木苺（薔薇科）
鶏頭（莧科）
竜胆（竜胆科）
三島紫胡（芹科）

花器　陶花器（藤平正文作）

アレカ椰子の生花

仙溪

花材　アレカ椰子（椰子科）
モンステラ（里芋科）
アンスリウム（里芋科）

花器　八角陶鉢

陰陽五行

「陰気な人」「陽気な人」などと聞くと、陰が悪くて陽が良い、と誤解するかもしれないが、決してそうではなく、すべてのものに役割を見いだす考え方が陰陽のものの考えだ。

違った役割を持つ対極のもの同士が互いに助け合い、新たなるものを生み出すという思想。

陰とは、冷たい、暗い、柔らかい、ゆっくり、大きい、精神、女、こういった性質。

相対する陽は、熱い、明るい、硬い、早い、小さい、肉体、男、このような性質を持ってる。

これらの性質は絶対的なものではなくて、相対的なものなのだ。

植物と動物では、動かない植物は「陰」で、活発に動き回る動物は「陽」と見ることができる。

植物においても、天（陽）へ向かって成長する部分は「陰」、地（陰）に向かって下降する部分は「陽」というふうに、陰陽の調和でなりたっている。

陰は陽を求め、陽は陰を求める。男と女、磁石のN極とS極が引き合うのもこの原理。

調和のとれたいけばなは、陰陽などと意識することなく、硬いものと柔らかなもの、伸びるものと集まるものというとり合わせをしている。そんなバランス感覚が、世の中のすべてのものに共通して大切なのだと、陰陽を知って改めて思う。

桑原専慶流いけばなテキスト639号　2016年9月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出逢い花（32）

仙溪

ポトスイエロー（里芋科）
パフィオペディルム（蘭科）

花器　緑釉陶鉢

はじめていけたが、ポトスイエローと呼ばれる葉はとても大きい。詳しくはわからないが、おそらく熱帯や亜熱帯の植物だろう。頑丈な葉は、厳しい太陽の光や強い雨風にも負けない逞しさを感じる。

などと見ていたら、今回の出逢い花のイメージが浮かんできた。

お相手には同じく南国の花で、不思議な姿のパフィオペディルムを選んだ。大小の葉と花の組みあわせ。普通のいけ方ではいけにくいけれど、出逢い花にするとちゃんと絵になってくれる。

逞しい葉の下に、ひょっこりと顔を出す森の妖精。器も森のみどりにして、植物の会話に聞き耳を立てる。

横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
10月号
No.640

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

出逢い花（33）

〈表紙の花〉　仙溪

芭蕉の枯葉（芭蕉科）
ダリア（菊科）

花器　天目釉「ふくら壺」
柳原睦夫作

不思議な形の実が口を開けたような器だ。写真では見えないが、三つの膨らみを持つ器で、どの角度から見ても異なった表情を持っている。

風をはらんだようにくるりと巻いた芭蕉の枯葉。深い赤色のダリア。これらを器の口を見せるようにいけてみた。器の膨らみと枯葉の丸みが呼応する角度を探しながら。

次にこの器にいける時は何がいいだろう。想像の翼をひろげて楽しんでいる。

横から見た奥行き

南京櫨（なんきんはぜ）

〈2頁の花〉　櫻子

花材　南京櫨（燈台草（とうだいぐさ）科）
鶏頭（莧（ひゆ）科）
ピンクッション
（ヤマモガシ科）
花器　デルフト焼陶花瓶

ナンキンハゼは白い実が印象的な花材だが、弾ける前の緑色の実も面白い。

作例では枝からぶら下がる実を造形としてとらえ、レモンイエローの鶏頭と鮮やかなオレンジ色のピンクッションをとり合わせて、西洋の陶花瓶にいけてみた。

ナンキンハゼは中国原産。ピンクッションは南アフリカ原産。ケイトウはインド原産。ある意味ミスマッチな出逢いでも、洋陶器にいけると違和感がなくなる。ただし花器の絵柄と花の色合いには注意したい。

横から見た奥行き

蓮台（れんだい）

＜3頁の花＞　櫻子

花材　蓮台（れんだい）（蓮科）
　　アンスリウム（里芋科）
　　偽小判草（にせこばんそう）（稲科）
花器　白黒陶扁壺（林平八郎作）

見た感じが渋く暗い印象の花材でも、とり合わせを工夫することで、意外に面白いいけばなになることがある。

蓮台がその一つで、例えば蓮台に菊では面白みに欠けるが（菊の品種にもよる）、アンスリウムとでは違った印象になる。アンスリウムは赤、薄ピンク、グリンと変化をつけ、さらにニセコバンソウ（西洋小判草、ワイルドオーツ）を加えると、全体に優しい雰囲気になる。

器の選択も重要なポイントだ。この白黒の花器は、まるで救世主のように花たちを一つにまとめてくれる。有難い特別で不思議な器だ。

横から見た奥行き

初歩の盛花

◎枝1本と花2本のいけばな

花材　丸葉の木（満作科）
　　スプレー菊2種（菊科）

花器　かいらぎ釉水盤（木村盛伸作）

ある程度のボリュームがある枝と、葉が美しくついた花のとり合わせなら、枝1本と花2本でも、シンプルないけばなの稽古になる。

たった3本をいけるだけだけれど、それぞれを、どんな角度に倒せばいいか、どんな長さに切ればいいか、考えながらいけることで、いけばなに大切なバランス感覚が養われる。

前後左右上下のバランス。枝の伸びと葉の繁みのバランスなどなど。シンプルなものほど、ものの働きを掴(つか)みやすい。

横から見た奥行き

巨人のいけばな感

今月の表紙の器を作られた柳原睦夫さんに聞いたお話。

柳原さんは前衛花道家の中川幸夫氏と親交があり、「手を入れるのが怖い！と思うような器を作ってよ。そしたら僕が命がけで花をいけるから」と言われたそうだ。

その言葉から真剣勝負の緊張感を覚えた。中川幸夫氏は、いけばなにどんな思いを持っていたのか。

いけばなに対する思いは人それぞれだ。経験とともに思いも深まるが、それぞれの時点の真剣な思いは、どれも皆いけばなにとって大切な要素なんだと思う。

でも、自分には無い、より深いいけばな哲学に触れることは、自分のいけばなにとって貴重な暗示になる。先の言葉に出合って、私がこれから花をいける時、きっと何かが違ってくるだろう。

言葉から受ける影響もあれば、写真から受ける影響もある。

工藤和彦先生の「アンデスの花影」という作品集では、古代ペルーの土器に、不思議な形や色彩の植物がいけられている。そこには花と器の出逢いを心から楽しんでおられる工藤先生を感じて、やっぱりいけばなはそうなんだと納得する一方で、真剣勝負の凄みに打ち震えてもいる。

二人の巨人のいけばな感は、多くの人に影響を与えている。

秋草の立花

仙溪

日本いけばな懇話会
「秋草をいける」 出品作

9月17日～18日　建仁寺西来院

花材　ススキ　チョウジソウ
　　ワレモコウ　クサボタン
　　フジアザミ　タムラソウ
　　サワギキョウ　サギソウ
　　シモバシラ　リンドウ
　　シロバナホトトギス
　　コギク

秋草だけで立てる立花ははじめてなので、良い経験になった。丁字草や草牡丹、霜柱などはいけるのもはじめてだった。丁字草の長細い葉はオレンジ色に色づいて美しい。草牡丹は関東ではよくいけられる花だそうだ。

いけこみ後、ゲストを交えた座談会をしたが、いけばなへの様々な思いが聞けて大変有意義だった。皆それぞれに熱い思いを持っている。

立華時勢粧（りつかいまようすがた）を読む ㉗

立花秘傳抄 一

常磐木（ときわぎ）之部（つづき）

今月号では一旦、文章の転載をお休みして、常磐木の部に出てきた花材について、「立花時勢粧」の立花図の中からいくつか紹介してみよう。

檜（ひのき）（文：テキスト637号）

「立花時勢粧」の絵図の中に、檜の真（しん）の立花は四図ある。一つはテキスト615号と637号ですでに二度掲載している。寺田八郎兵衛が立てた「左、草之対之花」で、右に松の真（寺田清兵衛）、左に檜の真という「対の立花」の左側（向かって右側）。檜に松、菊、小菊、梅擬、などがとり合わせられた秋の立花である。

あとの三つは春と夏と冬。常緑樹なので季節を問わない。その内二つは冨春軒が立てていることからして、檜は扱いが難しいことが想像できる。文中でも「初心巧者のわかちは檜にてよくあらわるる物なり」と述べている。

第三十五図
立花　檜除真　冨春軒
檜　晒木　芍薬　松　要　小菊

第二十四図
立花　柏除真　松本氏
柏　菊　小菊　梅擬　松　椿
柘植　著我

今号では春の芍薬との対比が見事な一瓶を掲載しておく。真の下がり枝と請の上り枝の形が絶妙なバランスだ。ちなみにこの絵図は「立花時勢粧・中」の二番目に登場する。冨春軒にとっても特に思い入れの深い一作と思われる。

柏（かしわ）（文：テキスト637号〜638号）

「立花時勢粧」の絵図の中に、柏が真（しん）に使われた立花は二作。

松本氏（初版では松本近江）の柏真立花は除真（のきしん）の内草（そう）の花形として「立花時勢粧・上」にある。柏の葉を左右二カ所で見せて、その間を梅擬や菊が繊細に伸びている。面と線の対比だ。また、花器の形が変わっている。釣り鐘形で、立花瓶には大抵あるくびれが無い。おそらく柏の形が際立つようにとの配慮だと思う。

弁秀の柏真立花は「雑体之図」が集められた「立花時勢粧・中」にある。こちらの柏は片側に集められ、立ち上る松とのバランスが見所となっている。

どちらも季節は秋で、柏の葉先が一部黄色くなったものを使っているのが彩色によってわかる。共通して菊と椿が取り合わされている。

第七十四図
立花　柏除真　弁秀
柏　松　苔　菊　小菊　椿　柘植

第四十二図
立花　松除真　濱崎九左衛門
松　晒木　百合　柏　夏はぜ
柘植　小菊　小羊歯　杜若　著我

弁秀の立花は、前掲の冨春軒の檜真立花と花形に共通したところを感じる。偶然の発見だが、冨春軒仙溪が好んだ花形の一つだろう。

もう一作、正真に柏を使った立花を掲載しておく。濱崎九左衛門の松真立花で、百合、杜若と取り合わされている。量感のある柏の正真は、常の立花の常識を覆すほどだが、下段から勢いよく立ち上る真の松と、左前方へ中段から下がる胴の晒木が花形に動きを与え、他の花材もそれに呼応するように伸びつつ不思議なバランスを作っている。柏の塊（かたまり）を正真に使うという発想にも、そこに動きを与える役枝の働（はたら）きにも、自由闊達な精神と技量を感じる一作である。花器の形も花形に呼応している。

第七十五図
立花　栂除真　寺内長三郎
栂　菊　小菊　松　晒木　苔　柾木
熊笹　夏はぜ　樫木　柏　檜扇

栂（とが）（文：テキスト639号）

「立花時勢粧」の絵図の中に、栂真（しん）の立花は寺内長三郎の一図のみで、他の絵図にも栂らしきものは見当たらない。簡単には集められない貴重な花材だったのか。

この栂真立花は曲（きょく）が少なく、静かで厳かな印象を受ける。右下の水際に栂の苔木が見え、正真、副（そえ）の菊と、胴の紅葉した夏櫨が彩りを与え、枇杷の大葉がメリハリをつけている。請の晒木は短めに、流枝の栂と控枝の松を目立たせている。

【訂正】
テキスト615　5頁　中段
別に花道の上に、七つの理あることあり。
←
七つの理あり事（わざ）あり。

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）
※立花図転載
『華道古典名作選集　立華時勢粧』（思文閣出版刊）

梅擬（うめもどき）

仙溪

花材　梅擬（黐（もち）の木科）
　　大輪菊「サンバマム」（菊科）
花器　陶水盤

そろそろウメモドキの出てくる季節である。小さな葉を丁寧に取り除くのは根気の要る作業で、他の花材にくらべても、特別に高価なのも頷ける。

葉が梅に似て、また梅の花を小さくしたような薄紫色の花が咲くので名付けられた。雌雄異株。花弁の数は4～5個、ときには6個の時もあるそうだ。実には発芽抑制作用があって、鳥が食べて糞と一緒に種が落ちたところで発芽するようになっている。鳥に種を遠くへ運んでもらうための工夫だ。

そしていよいよキクの季節でもある。この季節にしかいけられない糸菊や嵯峨菊、肥後菊などに加えて、近年は洋菊あるいは洋風の菊が増えてきている。その産地の中でも特徴のあるのが飛騨と兵庫（三木と淡路島）だ。それぞれ飛騨マム、兵庫サンバマムの名前で呼ばれているが、作例の大輪菊もサンバマムの一種である。

花だけでなく葉も美しく、生産者の情熱と愛情を感じる。独特の個性を活かせるとり合わせを考えたい。

朝の連続テレビ小説

仙溪

好き嫌いはあるだろうが、私はNHKの朝の連続テレビ小説をほぼ欠かさずに見ている。そして時には登場人物のセリフを書き留めることもある。

東北の大震災と原発事故以来、人と自然との関わり方を考えることが多くなったし、昔の人々の暮らしと現在とでは何がどう違っていて、これからどうすればいいのかと悩んだりする。そんな思いがあるので「あさが来た」のヒロインの姉夫婦の言葉に共感したり、「とと姉ちゃん」に描かれた戦中戦後の人々の暮らしとその思いに心を打たれる。

「大きうなろうやなんて思わんかてええ、地に足つけてしっかり歩くことさえできたら、それでええんだす」（はつ・あさが来た）

「誰に愛想笑いして頭下げることものうて、土の上に立って自分で耕して、ミカン作って家建てて子を育てて、こないな誇りあれへん。孫まで見せてもろて、有難すぎておつりくるわ」（惣兵衛・あさが来た）

「美しいものは、いつの世でも、お金やヒマとは関係がない。みがかれた感覚と、まいにちの暮しへの、しっかりした眼と、そして絶えず努力する手だけが、一番うつくしいものを、いつも作り上げる」（花森安治・『暮しの手帳』編集長）

山保呂之

櫻子

花材　山保呂之の実（茄子科）
　　秋明菊（金鳳花科）
　　桔梗（桔梗科）

花器　陶花器

大好きなヤマホロシの実。自然な動きの枝が器に留まると、なんともいえない愛らしさを感じる。この愛おしい感じは何なのだろう。森の中で宝石を見つけたような感覚。ここに居るよという声が聞こえてきそう。

ヤマホロシはヒヨドリジョウゴとよく似ている。茄子の花を小さくしたような白または薄紫色の花が咲いたあと、実が緑色から黄色、赤色へと色づいてゆく。

作例のヤマホロシは、葉の形もなんだか可愛い。小さいのに、アピールがとても上手。

シュウメイギクとキキョウは充分に水揚げしておいて、さっといけた。

野山の風情だが、緑色の斑点の器にいけると、明るく飾っておける。花形は自然体で。

野茨と竜胆の二瓶飾り

仙溪

主瓶　野茨（薔薇科）
　　花器：紺釉壺
副瓶　竜胆（竜胆科）
　　花器：朱塗り椀

8月の末に撮影したので、ノイバラの実がまだ緑色だが、一週間後にはオレンジ色の実になった枝が売られていた。

ノイバラは自然では棘だらけなので、痛くていけられない。今は棘の殆ど無いものが手に入るお陰で、この軽やかな実の美しさをいけて楽しむことができる。有難いことだと思う。

作例のノイバラは大きめの枝を2本買っていけているが、できれば3本はあったほうがいいだろう。

実が赤くない分、副瓶に朱塗りの椀を選んで色のバランスをとっている。主瓶には動きをつくり、副瓶は静かな佇まいに。

桑原専慶流いけばなテキスト640号　2016年10月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出逢い花（34）

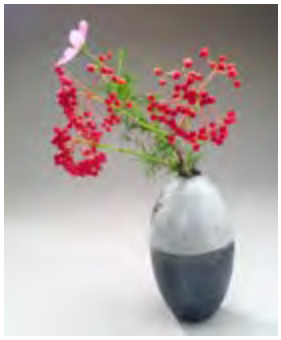
仙溪

ビバーナムの実（忍冬科）
秋桜（菊科）

花器　陶花瓶（清水卯一作）

ビバーナムの赤い実とコスモスを出逢わせてみた。しっとり艶やかな赤い実が不定型に集まって枝に留まっている。葉はすでに無いので、相手には葉のある花がいいが、多すぎても実が目立たなくなる。

コスモスは鉢植で買った。丈は短いけれど、切り花のコスモスではこんなに葉がしっかりしていない。白花もあったが、あえてピンクのコスモスを合わせてみた。モノトーンの器に、赤の濃淡と葉の緑が鮮やかだ。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
11月号
No.641

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

メラレウカ

仙溪

花材　メラレウカ（フトモモ科）
　　リコリス（彼岸花科）
　　ダリア（菊科）
花器　陶コンポート

メラレウカはオーストラリアの樹木でユーカリと同じくフトモモ科。作例のように黄金色になるものや赤くなるものなど種類が多く、芳香があってハーブとしても利用される。

オレンジ色の器にたっぷりのメラレウカを集めて、リコリス、ダリアで色の濃淡を楽しんだ。

メラレウカの木。大阪花の文化園。

横から見た奥行き

ムラサキシキブ

櫻子

花材　紫式部（熊葛科）
　　上臈杜鵑（百合科）
　　秋桜（菊科）

花器　陶花瓶

ムラサキシキブのような色の実は他にあるだろうか。独特の美しさがあって好きな花材だけれど、とり合わせに悩む。でも今回のとり合わせは自分でも気に入っている。

紫とは反対色の黄色。そこに桃色が少し加わることで紫の鮮やかさが増した。

立ち上るムラサキシキブと垂れ下がるジョウロウホトトギスの形の対比も面白い。コスモスの優しい葉の緑が、紫色の小さな実の足元をほどよく包んでくれた。

濃色の艶やかな花瓶が、色彩の引き締め役になってくれた。

横から見た奥行き

赤い実に紅葉を

＜4頁の花＞　櫻子

花材　鈴薔薇（薔薇科）
　　木苺（薔薇科）
　　薔薇（薔薇科）
花器　三足蓋付陶深鉢

赤い実に紅葉が重なると、互いの相乗効果でより強く秋を感じられるのに加えて、実と花だけでは表現できない華やいだ明るさを感じることができる。そしてなによりも実の表情が優しくなるような気がする。

秋色を際立たせようと、純白のバラをとり合わせた。子孫を残す実とやがて散る赤い葉と大きく咲こうとする花の対照が美しい。

3種の花材を料理するような気持で、鍋型の器にいけてみた。

横から見た奥行き

梅擬と紫蘭

＜表紙の花＞　櫻子

花材　梅擬（黐の木科）
　　紫蘭（蘭科）
　　白椿（椿科）
花器　耳付陶花瓶

梅擬の小枝を使って軽やかな投入にしたいと考え、色付き始めた紫蘭をとり合わせて、白椿で口元を引き締めた。

梅擬の艶やかな赤い実に白椿を添えると、凛とした美しさが生まれる。そこに紫蘭が加わることで雰囲気がずいぶん変わって見える。表情が柔らかくなり、優しさが加わる。

器も優しさを感じるものがいい。ほんのり赤みのある温かな風合い陶花瓶を選び、朱の敷板に飾った。

横から見た奥行き

京都市芸術文化協会創立35周年記念事業
京（みやこ）の文化絵巻Ⅰ
花鳥風月

会期　9月11日(日)
会場　ロームシアター京都
「鳥」の部　華道　桑原仙溪

邦楽、邦舞、洋楽、モダンダンス、能楽、狂言、書、今様、華道。総勢150人による舞台に参加させていただいた。杉信太郎さんの横笛に合わせ、今様の舞手に介添えをしていただき、雌雄の鳥をイメージした花をいけた。器は柳原睦夫氏の銀オリベ。花材は2.5ｍのカナリー椰子の新芽など。命の躍動を感じていただけたと思う。

立華時勢粧を読む　㉘

立花秘傳抄　一

常磐木之部（つづき）

棕櫚

非祝言。上。

正心、副、請。

朝鮮棕櫚は胴にも用いる。

棕櫚竹また面白き物なり。さりながら客花には用捨すべし。

詩に曰う。棕櫚の葉散じて夜叉の頭。

古歌

朝またき梢はるかに音つれてすろの葉過るむら時雨かな

杉

非祝言。上中。苔、晒木用いず。

古歌

いつしかに神さひにけりかく山の鉾杉かもと苔のむすまで

苔を遣いても苦しからざる證歌ありといえど、古来より苔を付けて立てる木、法式の外はこれを許さず。然れども自然と苔の付きたる心あらば、外の苔木を借り用いてもくるしからず。

古代は賀茂の神杉とて、若木の色よき、葉の茂りたるをもとめて多くさされしと師の云えり。然るに近頃は杉は魔のすむ木なりとて立てざるもおかし。詩に作り、歌に読みてやさしき物なれば、今様にこれを用いる。されども客花には用捨すべき物か。

うすの木　夏ばせ

祝言。

胴、流枝、控枝、前置。

幹太きは請にも用いる。

この二木、春の暮れより秋の中半まで紅葉するゆえ、照葉と名付けて瓶毎に用いるなり。かならず葉先をつくろい、葉を重ねて見事に見せんとすることなかれ。照葉はやわらかに軽く立てるをよしとす。

ふしくろ

非祝言。下段。

栗の若ばへ

祝言。下段。

檜の葉

祝言。下段。

まゆみ

祝言。中下。

衛矛、鬼箭。

猿すべり　猿滑

非祝言。中下。祝言に用いず。

證歌

足引の山のかげちの猿なめりそれらかにても世を渡らばや

柞

祝言。中下。

木ふときは請にも遣う。

樺木（多識）。

四聲字苑に云う。梳を作る。藻塩草にこなら栢、これ柞なり。

今回出てきた棕櫚を使っているのは二図あり、第三十二図・棕櫚真砂の物は以前掲載したが再び載せておく。雄株に棕櫚の古い株を立て、そこから若木が生まれた姿。棕櫚の素直な広がりに、雌株の屈曲した晒木でバランスをとっている。

第四十一図では棕櫚が見越と副に大きく使われ、請にさらりと夏櫨を出している。竹型の器が目を引く。

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）
※立花図転載
『華道古典名作選集　立華時勢粧』（思文閣出版刊）

第三十二図
二株砂物　棕櫚真
砂の物行の花形　西村松庵
棕櫚　百合　晒木　松　苔　嫩　杜若
小羊歯　柘植　若木

第四十一図
立花　松除真　高橋吉兵衛
松　棕櫚　夏はぜ　杜若　樫木
躑躅　著我　下野　嫩　晒木

柞（さく、なら、ははそ、いすのき）原文にルビが無いので読み方不明。

旱蓮木（かんれんぼく）

花材　旱蓮木（沼水木（ぬまみずき）科）
木苺（薔薇科）
ピンポン菊（菊科）
赤色　黄色

花器　練込陶花器　（写真①）

赤い実と菊いろいろ

仙溪

花材　野茨（薔薇科）
　　白糸菊　黄飛騨マム
　　スプレー菊　小菊（菊科）
花器　陶花瓶

先月号で兵庫サンバマムと梅擬の盛花を掲載したので、今月は飛騨マムを1本混ぜて野茨と投入にした。

野茨を広げた間に、前方へ長く4種類の菊を出している。

飛騨マムには多くの品種があるので特徴を一言では言いにくいが、ダリアのようなモダンさと、茎も葉も大切に育てられた和の姿の両方を兼ね備えた菊というところか。

菊は咲ききった後、水溜に浮かべて楽しんでいる。

水仙一色立花

＜10頁の花＞　仙溪

花形　水仙一色立花　真の行
花材　水仙（彼岸花科）
　　小菊（菊科）
花器　陶立花瓶

水仙の季節がやってきた。まずは真の花形で水仙一色立花を立ててみた。

葉に針金を入れ、自然な葉の動きを想像しながら形をつける。カクカクして、針金が入っていると分かってしまうようではいけない。といって形をつけず真っ直ぐなままではかえって不自然だ。怖がらずに曲げてみるのも大切である。

薮山査子（やぶさんざし）

＜11頁の花＞　仙溪

花型　草型（そう）　副流（そえなが）し
花材　薮山査子（やぶさんざし）（雪の下科）
花器　煤竹（すすだけ）竹筒

今年の10月は薮山査子の稽古が続いた。この写真は最初にいけたもので、別れ枝を副（そええ）に選んで、伸びやかな枝の動きを生かしている。この後5作いけたが、どれも違う感じにいけ上がった。その都度枝の個性も変わるので当然なのだが、納得のいく姿にいけるのはなかなか難しい。

散らずに残った葉がアクセント。

ゴンチャン先生とレモン師匠

日々のいけばなを紹介したくて、家で飼っていた猫のごんちゃんの写真を混ぜ「ゴンチャン花日記」というブログを始めたのは、私が家元を襲名した年だった。その後ごんちゃんがお星様になり、3年後にレモンがやってきた。今は「ゴンチャン先生」と名のってインスタグラムという所に写真を投稿している。いつも花を見に来るレモンは皆に愛され「レモン師匠」と呼ばれている。

猫に助けられ、時には教わることも多いわけだが、花も猫も人間も命を育む仲間なんだなあと、しみじみ感じている。今後とも、ゴンチャン先生とレモン師匠のコンビをよろしくお願いします。

桑原専慶流いけばなテキスト641号　2016年11月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

出逢い花（35）

仙溪

南瓜（瓜科）
葉鶏頭（莧科）
花器　天目釉酒器

岡山の原田先生から今年も南瓜をいただいた。なんともいえない存在感があったので、出逢い花の片方の花材として使わせていただいた。

出逢わせたのは小さな鉢で売られていた葉鶏頭。葉鶏頭を切って酒器にいけ、南瓜の横に置くだけで絵になってくれる。でも折角なのでもう少し面白い出逢わせ方はないかと考え、南瓜の上に乗せてみた。

写真のようになったわけだが、自分ではこれでいいのかどうかよく分からない。分からないけれど、自然の恵みに対する感謝の気持をこめて、大切にいけた結果なので、写真に撮ることにした。

いただいた箱からこの南瓜が出てきたときに感じた神々しさよりも、どちらかと言えば剽軽な感じになってしまった。でもひょっとすると、南瓜の原産地、中南米の森の神様はこんなお姿かもなどと、想像して楽しんでいる。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
12月号
No.642

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

アロエ「不夜城」

＜表紙の花＞　仙溪

花材　アロエ・不夜城（百合科）
　　アマリリス（彼岸花科）
　　枯紫陽花（紫陽花科）
花器　陶花瓶（宇野仁松作）

アロエの園芸品種の一つアロエ・ノビリスが不夜城と呼ばれている。キダチアロエが交配の親になっているそうだ。

キダチアロエはかつて「医者いらず」と呼ばれて、怪我や火傷の民間薬として重宝な植物であった。私も子供の頃、外でころんで擦り剥いた傷を治してもらったことがあるが、そんな利用法を知っている人も少なくなってきた。

作例のアロエは茎がぐにゃりと曲がっていたのでその動きを生かした。鉢から切るのは勇気が要るので、ここ一番という時に、その価値に相応しい花材をとり合わせていけたい。

大輪深紅のアマリリスで温かみと優しさを加え、少し青みの残る枯紫陽花が両者のつなぎ役になってくれた。花器はどこか西洋的な雰囲気を感じる宇野仁松作の花瓶を選んだ。枯紫陽花とアロエの根の色が器と同化して不思議な一体感を感じる花になった。

桐と梅擬と寒菊

＜2頁の花＞　仙溪

花材　桐（桐科）
　　梅擬（黐の木科）
　　寒菊（菊科）

花器　紅彩釉花器（宇野仁松作）

ざっくりとした季節の投入。

大きな口の器にたっぷりの水を入れ、あまり背が高くならないように、奥行きのある花型に二種の枝を留めてゆく。桐も梅擬も葉が無いので葉の茂った花を添える。ここは敢えて寒菊を選び、黄色い蕾と赤い実を引き立てた。

黄金の舟形花器

＜3頁の花＞　櫻子

花材　ネリネ（彼岸花科）
　　槍鶏頭（莧科）
　　ドラセナ（竜舌蘭科）

花器　金彩舟形花器

この舟形の器は両親がニューヨークで買ってきたもので、「花ふたり旅」にも使われている。金箔で装飾が施された煌びやかな器だ。軽い器なので重たい花材は似合わない。白いネリネと槍鶏頭、赤い縁取りのドラセナを膨らみのある扇型にいけてみた。

12月は赤と白の組み合わせをモダンにいけたくなる。そんな時の為の器を普段から見つけておきたい。

スターリンジア

櫻子

花材　スターリンジア（フトモモ科）
　　ガーベラ2色（菊科）
　　ステンレス玉
花器　赤色ガラス鉢

この白い小さな玉はスターリンジアといい、オーストラリア原産のフトモモ科の植物だ。フトモモ科といえばユーカリが思い浮かぶが、他にもワックスフラワー、ブラシノキ、それにグアバ、フェイジョアといった果樹などもフトモモ科の植物と覚えておきたい。

スターリンジアは赤や青に染められたドライフラワーのこともあるが、生の切り枝ははじめていけた。細い銀色にも見える毛が球形に生えて可愛らしい。赤と白のガーベラの鉢を見つけたので、鉢から土ごとはずしてビニールで包み、そのまま花器に入れて使った。毎朝少量の水を土に染み込ませて、長く飾っておけた。

横から見た奥行き

立華時勢粧を読む　㉙

立花秘傳抄　一

常磐木之部（つづき）

晒木

非祝言。上中下。

晒木を用いる木八つあり。楓、柳、松、檜、梅擬（ほそき晒を用いる）、柏（同上）、梅（口伝）、円栢。

晒木は高山の大木、しかもその性かたく齢久しき物は、かならず木ずえ晒木となるなり。凡そ晒木に生を付けんと思わば、必ずまず出生を見立て、それぞれに能く相応したるを専一とす。

楓、松、檜、円栢、右の四木は高山出生の物なれば、白くよく晒て景気異曲にするどなるを用うべきなり。

梅擬、柏はさのみ高山の物ならねば、白く晒するどなるはうつらず。枝ほそくすなおなるを用うべき。此のさかいよくよく工夫なして立つべきものなり。

柳は幽谷岸上に生える物なるゆえ、白くきれいに枝くるいたるはうつらず。朽木の柳といえば、やわらかに朽ちたるごとくなるをよしとす（口伝）。

梅のしゃれは太きを嫌ず。ところどころ苔の付てやわらかなるは景気よくうつる物なり。是一つの習いなり。

晒木は古法に水際にて見する事を嫌うといえども、立て様にてくるしからず。

苔

非祝言。上中下。多識に云う、百蕊草、艾納。日本私記、蘿、蘚。和名、日影草（木の苔未詳）

堀川百首

よこね島下葉におふるさかり苔露かからねばかわくまもなし

新千冬

みどりなる苔のむす木も白妙の雪ふりにけり天のかぐ山

古来祝言の花に苔を遣うといえど今様に是を用いず。自然と葉の付きたる木に苔の付たるは用うべきか。枯れて葉もなく朽ちて枝もなき木に、苔の付たるを祝言とはいいがたし。立花制法の言葉にいう、祝言の花に嫌うべき物、すえのとまりたる物、枯れたる枝、この言葉顕然なり。和名に日陰草とあれば目出度き物なりと云えり。大に笑うべし。さざれ石の巌となりて苔のむすまでと読めるはあれども、木に付たる苔を祝儀に読める証歌ありや覚束なし。されば極真立の花に苔を用いざることを、是祝言にあらざる道理必然なり。

苔木祝言にあらずといえど、松の一色には遣うて苦しからざる、口伝あり。ある師の云う、たとえば貴人高位の御祝に饗膳を奉るに干したる魚、死したる鳥、そのかたちながらも奉ると

円栢＝伊吹（柏槙、真柏）。

いえど、御祝いの大本（たいほん）にひかれて不祝儀とは云いがたし。松の一色もかくのごとし。松は祝言第一の物、その上余木をまじえず立てる時はこれ極々の祝儀なる故、苔をまじえても苦しからずと云えり。しかれどもすこしづつのあしらいに遣いて七つの大枝に遣うことなし。この説の外口伝あり。

追善の立花に苔晒木を立てざる流もあり。又立てる流もあり。その立てざると云う道理いかにと尋ねるに、返答まちまちなれども正理に叶わざるによりて爰（ここ）に略す。師伝に云わく、百年ないし二、三百年の追善の立花には、必ず松などの老いたる苔晒木の年ふりたる気色を瓶にうつすべしと云えり。然るにこの教えの心を取りちがえて新仏の追善には苔晒木を立てざると心得たるものか。苔晒木は立花第一の荘厳と見る時はさのみ嫌うべきにあらず。

苔晒木を遣うに習いあり。たとえば人の子を養って我が子と見るように育てる心をもって指すべしと云えり。されば鎌倉の栢樹（いぶき）に熊野の晒木、その生所万里へだつといえど瓶上に立て合わするに体用和合して一木の景気をなす。これ立花の妙にあらずや。初心巧者によらずこのさかいをよくよく工夫して上手になるべし。花道の楽（たのしみ）とするところこれより外はなし。

「御祝いの席では、生きた木に自然に苔がついているものは良いが、枯木の苔は相応しくない。極真立にも苔木は用いない。又、松一色にはあしらいに使ってよい。」と書かれている。今はあまりこだわらずに使うが、心得ておきたい。

鎌倉の伊吹に、遠く離れた熊野の晒木を立て合わせて一木の景色をつくる。そんなところに花道の楽しさがあるとも述べている。

この後、苔木晒木の解説はまだ続くが、「立花時勢粧・中」より一株砂物の図を紹介しておく。初版では冨春軒作となっている。梅の苔と松の晒が花形の要（かなめ）になっている。

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』
（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』
（大日本華道界刊　思文閣出版刊）
※立花図転載
『華道古典名作選集　立華時勢粧』
（思文閣出版刊）

第七十七図
一株砂物　西村松庵（初版では冨春軒）
梅　苔　松　晒　水仙　椿　著莪　嫩

第31回国民文化祭・あいち2016 華道フェスティバル

会期　11月1日(火)～6日(日)
会場　名古屋市民ギャラリー栄
(公財)日本いけばな芸術協会・役員招待出品　桑原仙溪
花材　サンスベリア・アルボレッセンス（竜舌蘭科）
アロエ・不夜城（百合科）
アンスリウム（里芋科）
アンスリウムの枯葉
花器　陶大壺（近藤豊作）

今号の表紙と裏表紙の花材を名古屋での花展に出品した。どちらも葉先が尖っているので扱いに難儀したが、近藤豊さんのどっしりした器がしっかりと受け止めてくれた。

会期中「琳派400年、花遊びの系譜」「いけばなの未来」をテーマに記念講演会・シンポジウムがあった。

合間を縫って徳川美術館へ行ってみたが、解説が分かりやすく、江戸時代の武家文化を垣間見ることが出来た。中でも鼓箱のお囃しと舞のデザインが秀逸でしばし見入ってしまった。私にとって貴重な出逢い。

（写真①②）

立花時勢粧の水仙一色立花

仙溪

花型　水仙一色立花　行の草
花材　水仙（彼岸花科）
　　寒菊（菊科）
花器　銅立花瓶
撮影　水沢圭介

京都新聞に一年間連載される「華の時代　二条城にいける」のために立てた水仙の立花。背景は二条城二の丸御殿「遠侍（とおざむらい）」勅使（ちょくし）の間に隣接する帳台構（ちょうだいがまえ）。（11月11日㈮夕刊掲載）

ぼんやり見える障壁画は菊である。狩野甚之丞（かのじんのじょう）（永徳の甥）の作とされている。

今回の撮影にあたり、「立花時勢粧　下」にある「水仙一色」3図のうちの一つを模してみることにした。絵の中の葉が立体としてどこへ出ているのか想像しながらだったが、まさに「自由」を得た人の表現だなと感じた。

教わった花型にいけることはいつかできる。その先の「自由自在」な花を目指そう。

立花時勢粧より

赤芽柳

仙溪

花型　生花　草型　留流し
花材　赤芽柳（柳科）
花器　煤竹竹筒

赤芽柳15本の生花。赤芽柳は日の当たる側と裏側とでは枝の色が違う。いけ終えた時に飴色の木肌がすべてこちらをむいてくれると、全体が一体になって美しい。

作例は枝の捌きに乱れが残るが、多少目をつむって花型の参考に掲載しておく。

横から見た奥行き

東寺・灌頂院 夜叉神立像　献花 這柏槙の生花

仙溪

花型　生花　草型　副流し
花材　這柏槙（檜科）
花器　銅薄端

弘法大師空海が彫ったと伝わる夜

叉神立像（阿形と吽形）の特別公開にあわせて、京都いけばな協会から10名が献花のいけばな展をさせていただいた。私は両像の間に居られた不動明王立像（平安時代）の横に、ハイビャクシンを銅器にいけた。

私ははじめて夜叉神像を拝んだが、普段はそれぞれ専用のお堂に居られるので、格子の間から拝まれる方も多いと聞く。歯痛を治して下さるとも。

夜叉神様の全身は蜂の巣穴が開いて痛々しい。それでもなお見る者に不思議な力を与えて下さる。照明に浮かぶお顔は、想像していたよりずっと優しい印象。周囲のいけばなを喜んで下さっているようだった。

ねこちぐら

去年の冬に戴いたねこちぐら。レモンちゃんは寒くなるとねこちぐらの中で丸まっていることが多い。お気に入りのマイホーム。

桑原専慶流いけばなテキスト642号　2016年12月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

サンスベリア・アルボレッセンス

仙溪

花材　サンスベリア・アルボレッセンス（竜舌蘭科）
　　アンスリウム（里芋科）
花器　陶大壺（近藤豊作）

この観葉植物はサンスベリアの仲間で、硬い緑色の葉の先端が鋭く尖っている。アルボレッセンスとは「木のような」とか「木の性質をもった」という意味だそうだ。いわゆる「木立サンスベリア」である。名古屋の花展で、同じ器に立てていけた（8頁）ので合わせてご覧いただきたい。花茎の枯れたものがでていたので傷めないように大事に残して撮影した。朽ちた物の持つ自然味が加わると、植物の経てきた時間に思いを巡らせられる。